安曇野検定【総合編】ジュニアの部　学習資料

未来につなぐふるさと安曇野

安曇野市教育委員会

目　次

はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

１．安曇野市ができるまで

（１）２つの大きな合併（がっぺい） ・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

（２）地図で見る現在（げんざい）までの変化 ・・・・・・・・・・ 5

２．交通網（こうつうもう）の整備（せいび） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

３．くらしの発展（はってん）

（１）人口の変化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

（２）まちのかたちと住宅地（じゅうたくち）の広がり ・・・・・・・ 17

（３）公園の整備 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

（４）くらしを支（ささ）えるその他の施設（しせつ） ・・・・・・・・ 22

４．産業の発展

（１）農業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

（２）畜産業（ちくさんぎょう） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

（３）林業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

（４）水産業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

（５）工業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

（６）商業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

５．観光と交流の進展（しんてん）

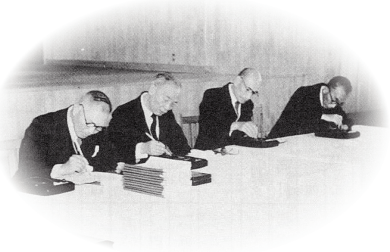
（１）観光 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

（２）交流 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

はじめに

この本では、主に、戦後（太平洋戦争を終えた後）から現在までの、安曇野市の歴史を振り返りながら、わたしたちがくらしているまちの特色を学んでいきます。

		【安曇野市の主な出来事】	【世の中の主な出来事】
昭和	S20		太平洋戦争終結(S20)
	S30	旧５町村（豊科町、穂高町、三郷村、堀金村、明科町）が誕生(S29～32)	昭和の大合併(S28～S36)
	S40	県営ほ場整備事業開始(S45)	松本空港開港(S41)
	S50	安曇広域農道全線開通(S56)	松本市を主会場に、やまびこ国体開催(S53)
	S60	長野自動車道豊科IC※開通(S63)	
平成	H元		長野自動車道全線開通(H5)
	H10	国営アルプスあづみの公園開園(H16)	長野冬季オリンピック(H10)
		安曇野市が誕生(H17)	平成の大合併(H11～H22)
	H20		



合併調印式(S29 穂高町)

合併調印式(H17 安曇野市)

※インターチェンジ（高速道路の出入口）のこと

注）この年表では、「昭和」を「S」、「平成」を「H」の文字で、それぞれを表しています。

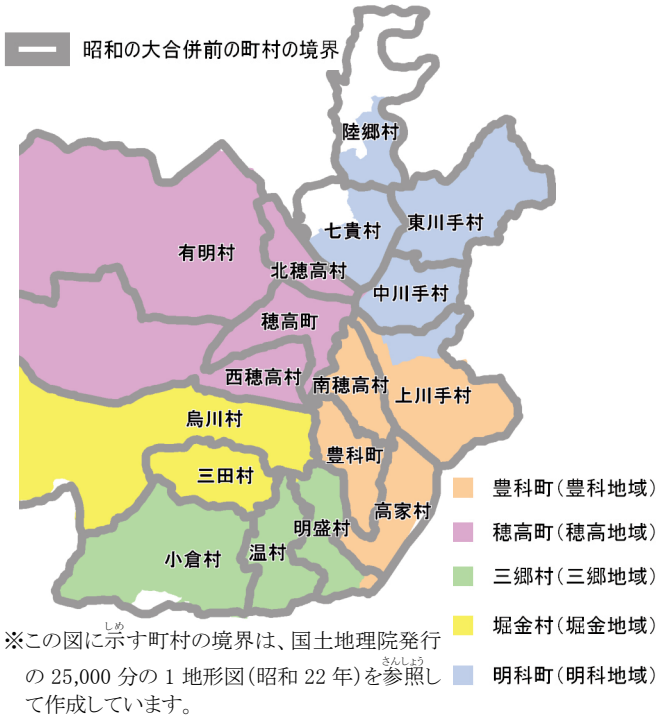
1．安曇野市ができるまで

（1）2つの大きな合併

昭和の大合併　～17の町村が5つの町村に～

現在の豊科、穂高、三郷、堀金、明科の5地域は、少し前まで、それぞれが1つの町や村でした。

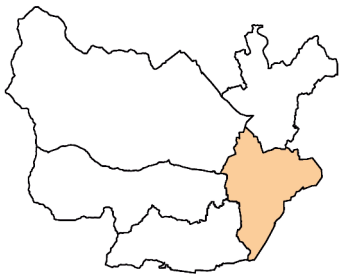
さらに今から60年くらい前までは、もっと細かな町や村に分かれていて、昭和30年頃、全国各地で進められた「昭和の大合併」により、17あった町村が5つの町村（現在の5地域）になりました。



※この図に示す町村の境界は、国土地理院発行の25,000分の1地形図（昭和22年）を参照して作成しています。

図1　昭和の大合併以前の町村の境界

豊科町

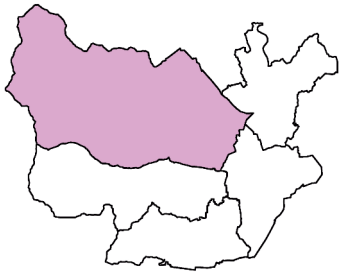


現在の豊科地域にあたる豊科町は、昭和30年1月15日に、豊科町、南穂高村、高家村の1町2村と、上川手村の一部が合併して、誕生しました。

◆「豊科」の名の由来

「鳥羽（とば）」、「吉野（よしの）」、「新田（しんでん）」、「成相（なりあい）」のひらがな読みの頭文字を順につなげて、「豊科（とよしな）」の名が生まれました。

穂高町

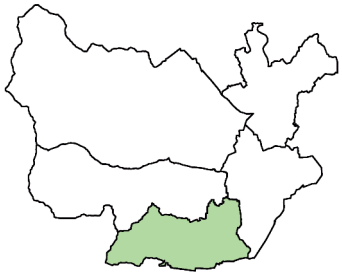


現在の穂高地域にあたる穂高町は、昭和29年11月3日に穂高町、西穂高村、有明村、北穂高村の1町3村が合併して誕生しました。

◆「穂高」の名の由来

「穂高」の「穂」は、他よりも高くとび出していて目につくものを表す言葉で、その由来は定かではありませんが、高い所を表す地名ではないかと言われています。

三郷村

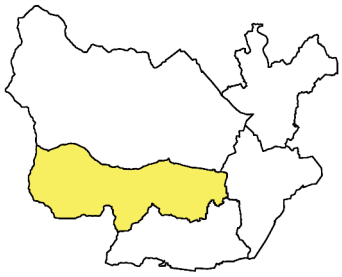


現在の三郷地域にあたる三郷村は、昭和２９年６月１日に小倉村、温村、明盛村の３村が合併して誕生しました。

◆「三郷」の名の由来

「三郷」の「三」は、小倉、温、明盛の３村を表し、「郷」は村のことを意味しています。これは当時、新しい村の名前として応募のあった 1,120 件の中から決められました。

堀金村

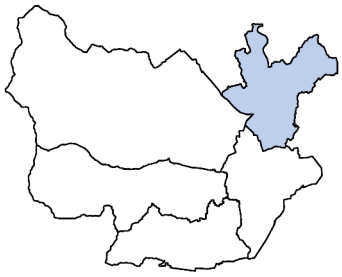


現在の堀金地域にあたる堀金村は、昭和３０年４月１日に烏川村と三田村の２村が合併して誕生しました。

◆「堀金」の名の由来

「堀金」は、「開墾（**ほり**）の（**が**）根っこ（**ね**）」という説があり、山（常念岳）の根っこ（ふもと）を開墾した場所を表す古い地名で、合併前の烏川村と三田村の組合立の小学校と中学校には「堀金」の名が付けられていました。

明科町



現在の明科地域にあたる明科町は、昭和３０年から昭和３２年までの間に、中川手村、東川手村の２村と、上川手村の一部、七貴村の一部、陸郷村の一部が、合併して誕生しました。

◆「明科」の名の由来

「明科」の「科」は階坂（科坂）に由来すると言われていますが、その意味は、段丘地形であるとか、険しい峠であるとか様々な説があります。いずれにしても「明科」は、地形に由来する古くからある地名です。

５つの町村の時代に、豊科町、穂高町、三郷村、堀金村の４町村は、梓川村※1、安曇村※1、奈川村※1とともに「南安曇郡」でした。明科町は、波田町※1、四賀村※1、麻績村、生坂村、山形村、朝日村、坂井村※2、本城村※2、坂北村※2とともに「東筑摩郡」で、郡が違っていたんだ。

「郡」は、今は単に地理上のまとまりを表しているだけだけど、明治 11 年から大正 12 年までは、府や県の下に位置付けられる行政の単位だったんだよ。

※1　現在の松本市　※2　現在の筑北村

平成の大合併　～５つの町村が１つの市に～

安曇野市は、平成 17 年 10 月１日に、豊科町、穂高町、三郷村、堀金村、明科町の旧５町村が合併して誕生しました。

この頃は、昭和の大合併と同じく、全国各地で合併が進められていました。「平成の大合併」とも呼ばれ、それぞれの市町村が人口や面積を大きくして、自立したまちづくりを目指しました。

現在の安曇野市は、長野県内の市町村の中で６番目に多い人口と、９番目に広い面積をもっています。

図２　安曇野市の市章

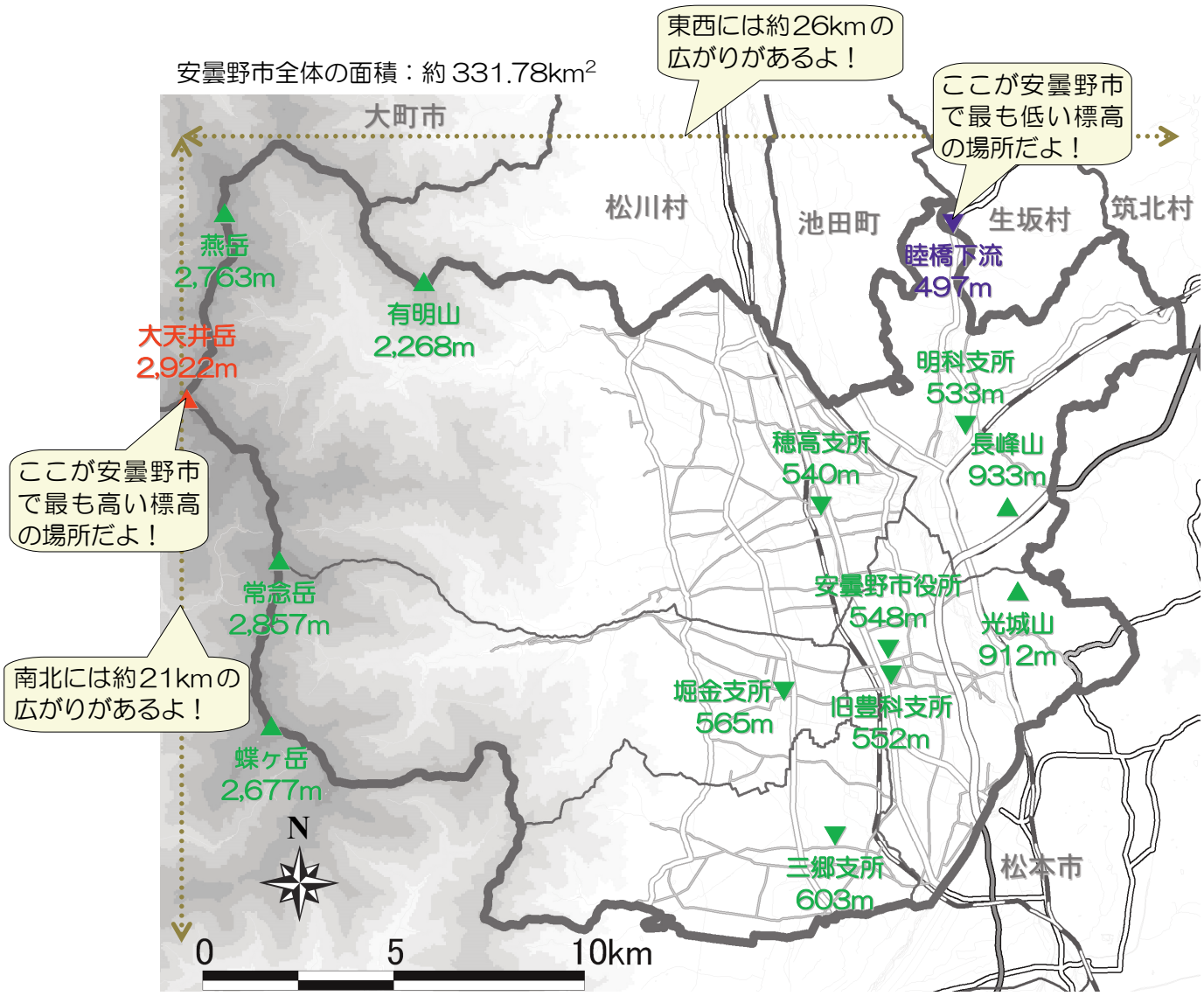


図３　安曇野市の東西南北の広がりと主な場所の標高

（2）地図で見る現在までの変化

旧５町村が誕生する少し前の昭和 22 年の地図と、安曇野市が誕生する少し前の平成 13 年の地図（わたしたちが通う小学校周辺）を見比べて、この間の地図上の変化を見てみましょう。

○○小学校周辺

昭和 22 年の地図※1

↓

わたしたちのおじいちゃんや
おばあちゃんが生まれた頃

平成 13 年の地図※2

↓

わたしたちが生まれた頃

２つの地図を見比べて
違いを探してみよう！

※１　地図上の地名など横書きの文字は、右から左に向かって読みます。
例）地図上の「原柳」→「柳原」

※２　穂高北小学校周辺の地図（９ページ）のみ、平成 23 年の地図です。

地図に出てくる記号の意味（凡例）

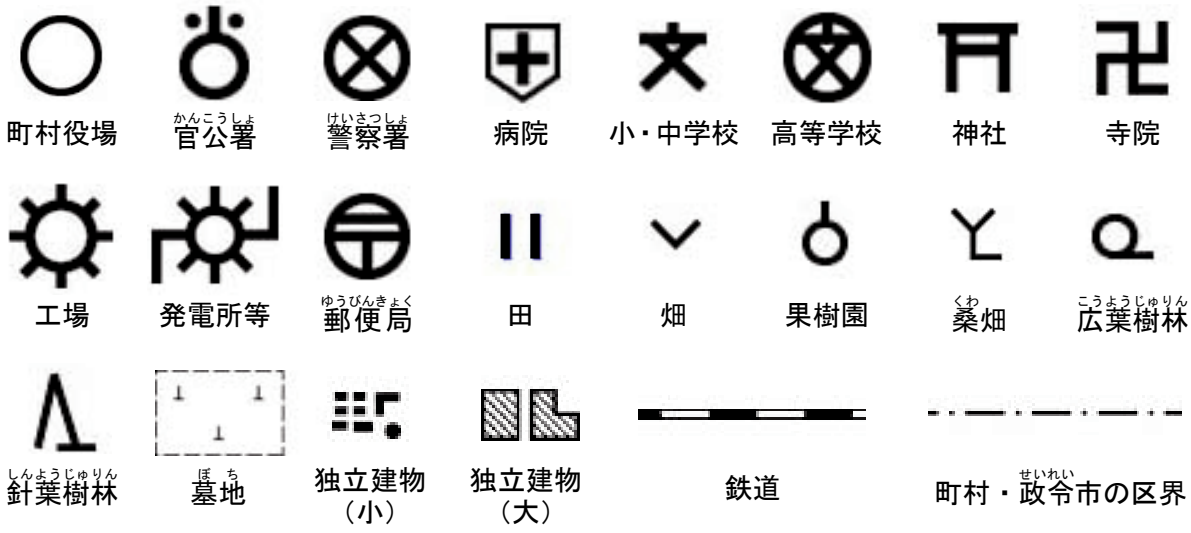


図４　地図の見方

豊科北小学校・豊科南小学校周辺

図５−①　昭和 22 年

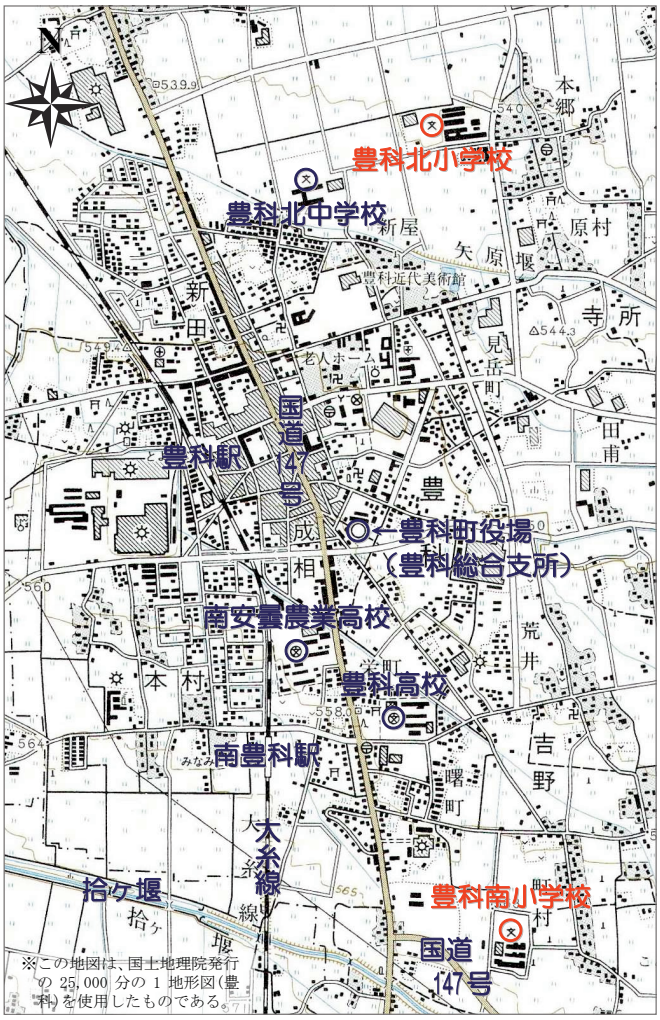


図５−②　平成 13 年

上の２つの地図を見比(みくら)べて、違(ちが)い（54 年間の変化）を探してみよう！

○　昭和 22 年の地図を見ると、今の豊科北小学校の位置には「南穂高小学校」という今とは違う名前の小学校があったんだね。

○　現在(げんざい)、豊科南小学校のある場所は、昭和 22 年の地図ではまだ田んぼだね。その位置よりも北側に、「豊科小学校」という名前の小学校があったんだね。

○　豊科駅付近を中心に国道 147 号沿(そ)いにしかなかった市街地※が、その周辺にかなり広がったことがわかるね。大きな工場やまとまった住宅地(じゅうたくち)がたくさんつくられたんだね。

※住宅やお店などが多く集まっているところ

豊科東小学校周辺

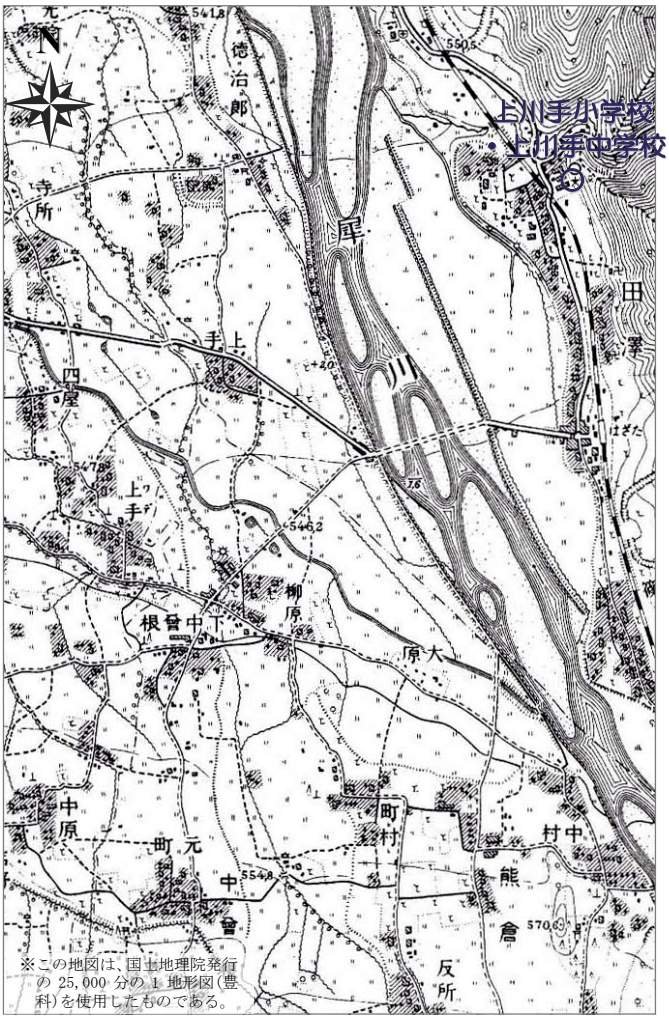


図６−①　昭和 22 年

図６−②　平成 13 年

上の２つの地図を比べて、違い（54 年間の変化）を探してみよう！

○　現在、豊科東小学校のある場所は、昭和 22 年の地図ではまだ田んぼだったんだね。その位置よりも北側で、篠ノ井線の東側には、「上川手小学校」という名前の小学校があったんだね。

○　犀川の東側に比べて、西側は大きく変わったね。大きな変化は、南北に走る高速道路（長野自動車道）と豊科 IC（現在の安曇野 IC）ができて、その周辺に道路や工場がつくられたり、大きな住宅団地（犀川の西側）ができたことだね。

○　地図北側の徳治郎の集落や、南側の熊倉や中曽根の集落は、昔のままで、外側にも住宅地が広がっている様子はないね。

穂高南小学校・穂高西小学校周辺

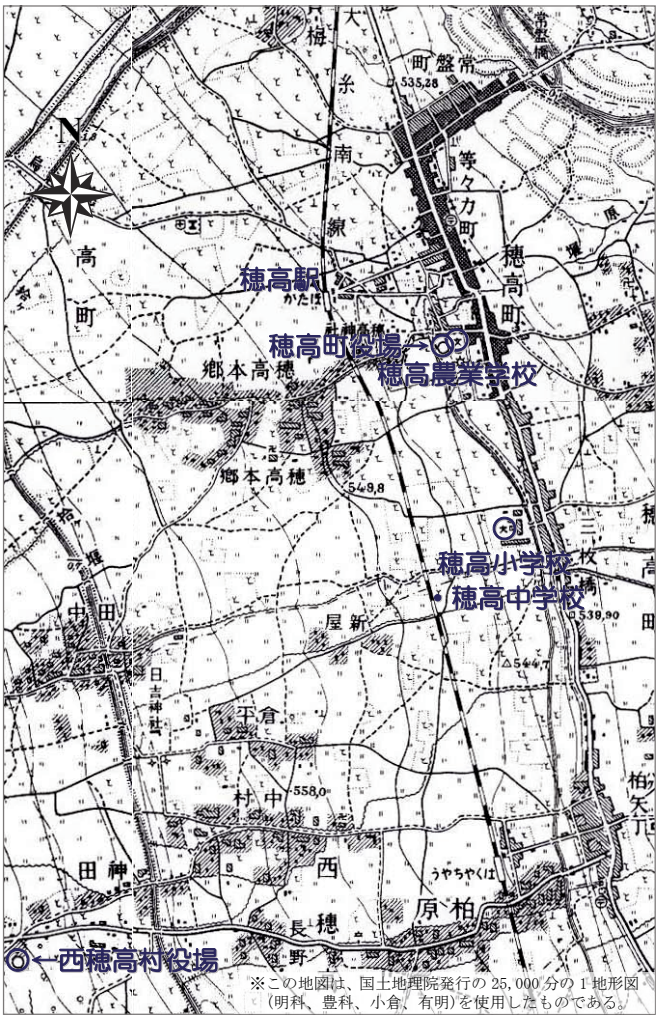


図 7－①　昭和 22 年

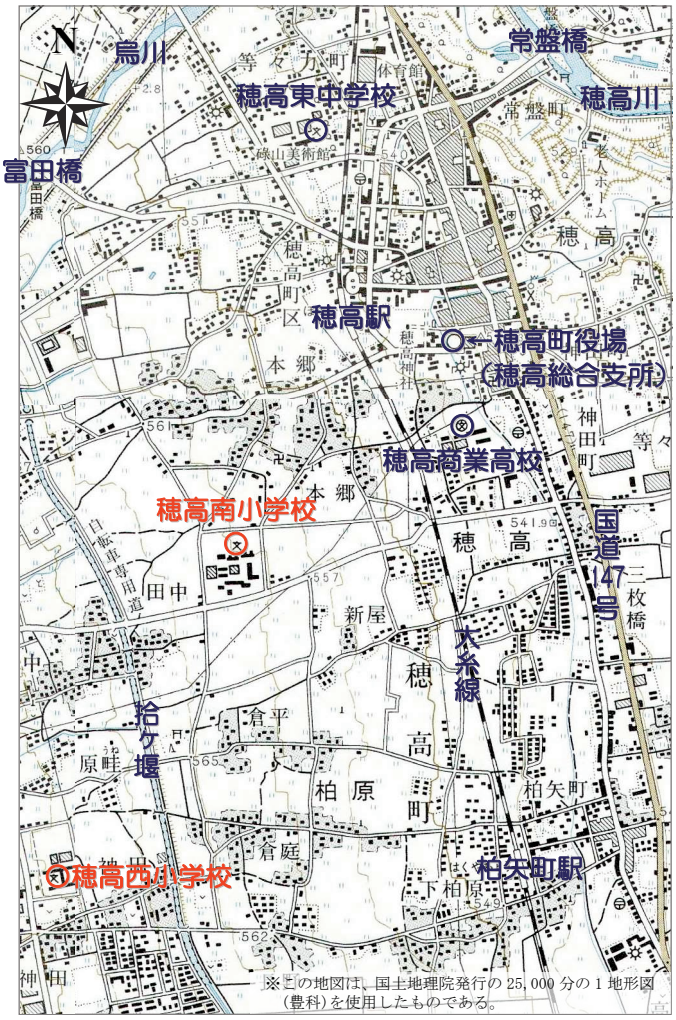


図 7－②　平成 13 年

上の２つの地図を見比べて、違い（54 年間の変化）を探してみよう！

○　昭和 22 年の地図では、穂高南小学校や穂高西小学校の今ある場所はまだ田んぼだったんだね。現在の穂高交流学習センター「みらい」の場所には「穂高小学校」という名前の小学校があったんだよ。

○　現在の国道 147 号の西側に並んでいる道路が、昔は国道 147 号だったんだよ。大糸線から東側はかなり変わったね。穂高駅前周辺も昔はまだ桑畑や田んぼの入り混じる農地で、市街地は常盤橋から旧国道 147 号だった道路沿いだけだったんだ。

○　一方、大糸線西側は、穂高西小学校の南に住宅地ができたり、道路の幅は広くなったけれど、道すじは昔のままのものが多いね。

穂高北小学校周辺

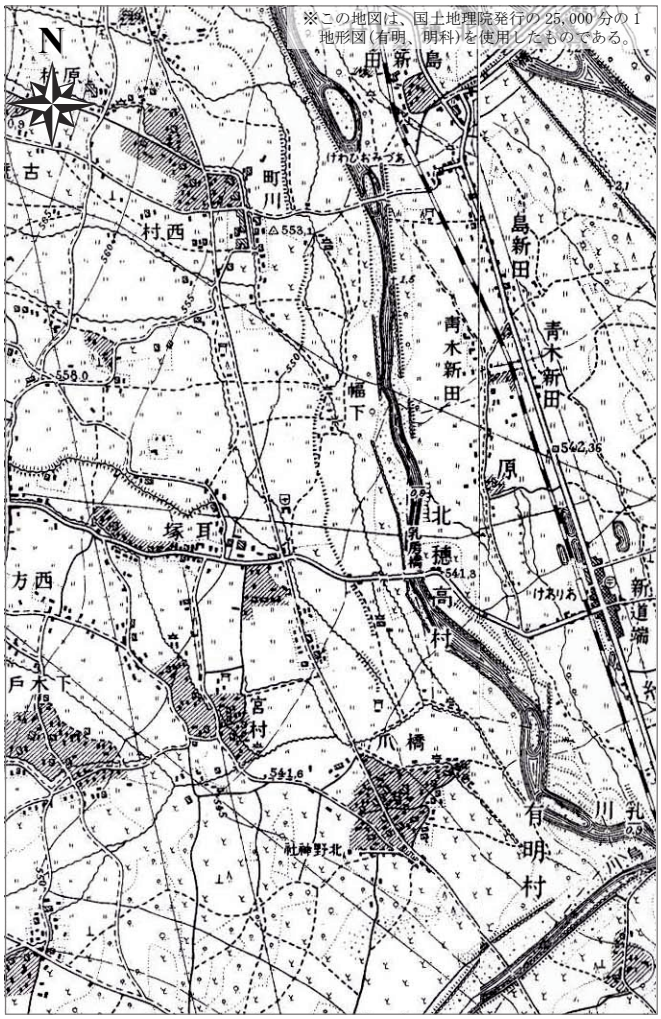


図８−①　昭和 22 年

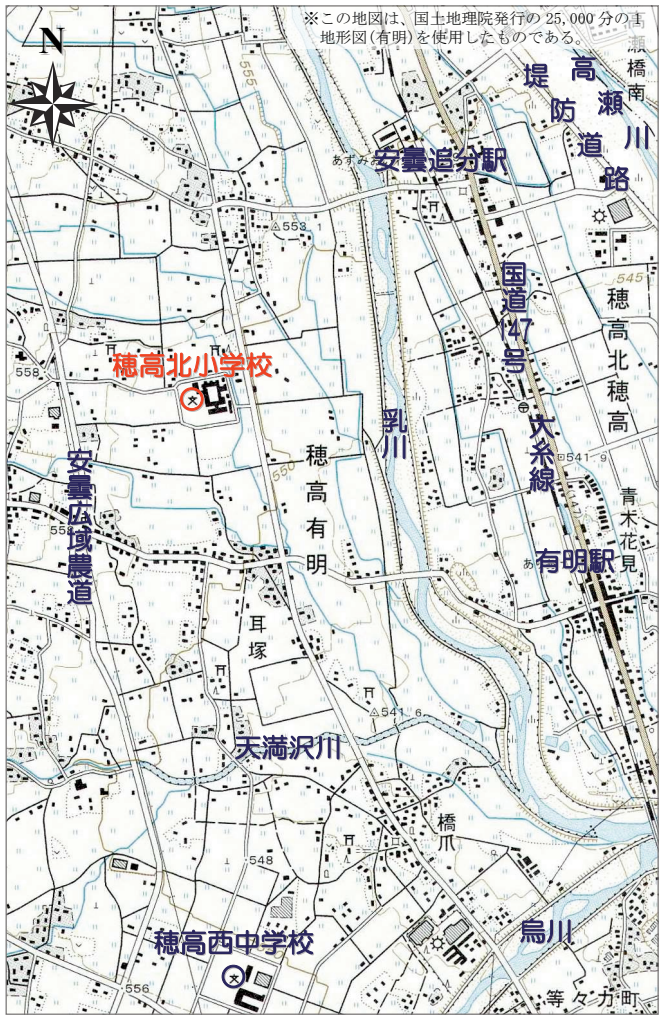


図８−②　平成 23 年

上の２つの地図を比べて、違い（64 年間の変化）を探してみよう！

○　穂高北小学校は、昭和 22 年の地図にはまだ載(の)ってないね。田んぼや桑畑が広がっていたんだね。

○　地図の西側を南北に走る安曇広域(こういき)農道は、その道すじすら昔はなくて、全く新しくつくられた道路なんだ。また、地図の北側を斜(なな)めに横切っている道路は、長野冬季オリンピック開催(かいさい)（平成 10 年）に合わせて豊科 IC から大町や白馬方面に行きやすくするために、それまであった堤防(ていぼう)道路の道幅(みちはば)を広げてつくられた道路なんだ。

○　地図の南側はほとんどが桑畑で、今は道路がまっすぐに整った田んぼに変わり、工場や穂高西中学校ができているね。

三郷小学校周辺

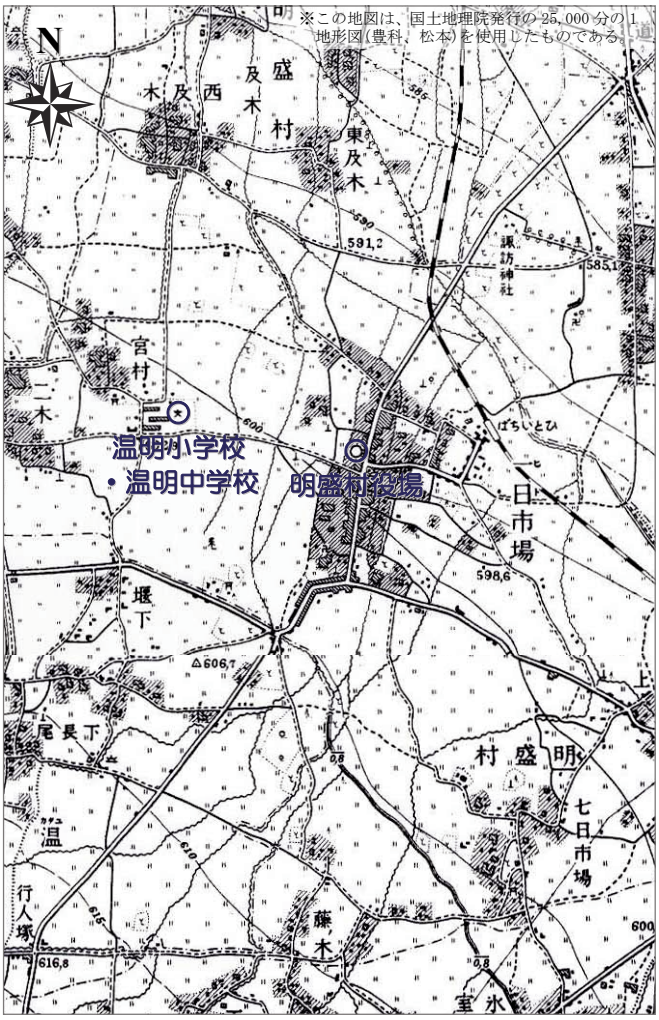


図９−①　昭和 22 年

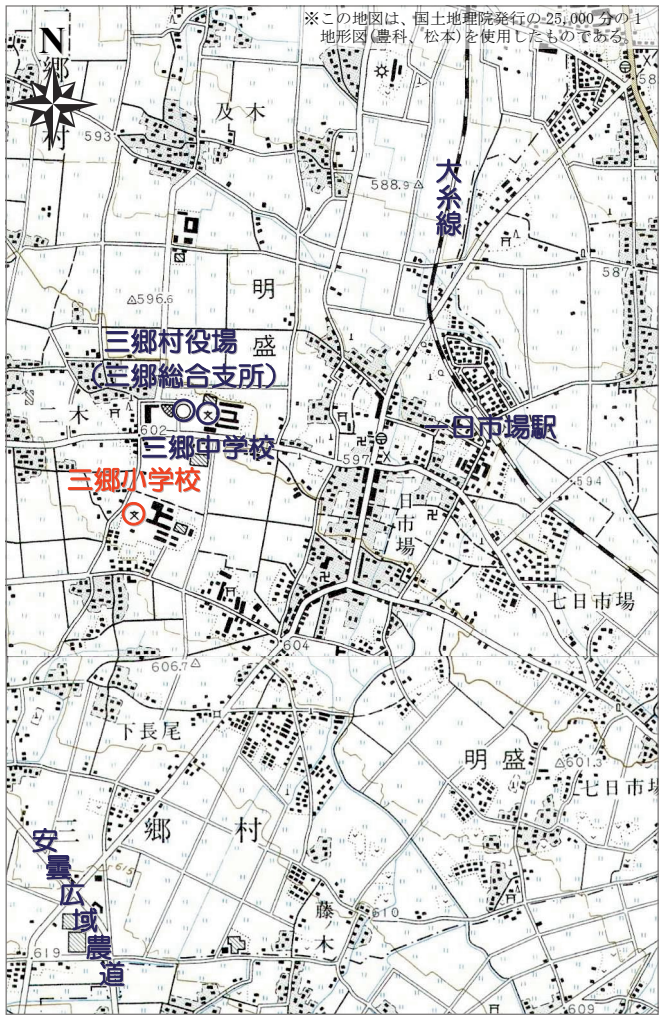


図９−②　平成 13 年

上の２つの地図を見比べて、違い（54 年間の変化）を探してみよう！

○　三郷小学校は、昭和 22 年の地図では今の位置にないけれど、少し北側（現在の三郷総合支所の場所）に「温明小学校」という名前の小学校があったんだよ。

○　一日市場駅西側の市街地を貫く道路は、幅が広くなったものの、道すじはほとんど昔のままだね。豊科駅周辺や穂高駅周辺の市街地に比べると、市街地が外側に大きくなっている様子はないね。

○　その一方、市街地から少し離れたところに、点々と大小の住宅地ができてきたことがわかるね。また、地図の南側には、安曇広域農道がつくられ、この道路沿いに大きな店舗ができたんだね。

堀金小学校周辺

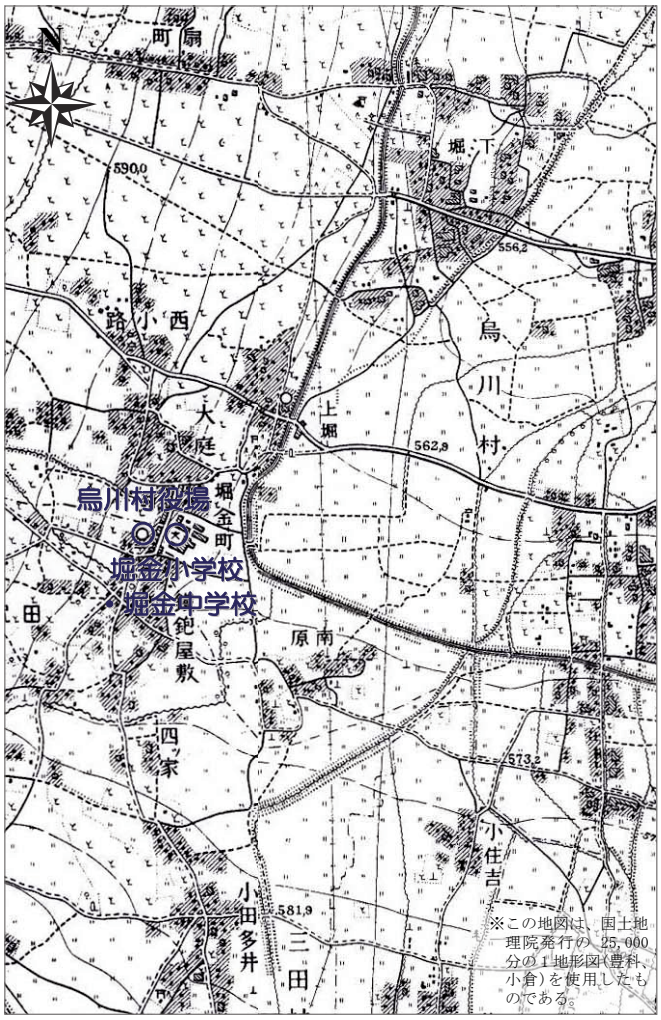


図 10-①　昭和 22 年

図 10-②　平成 13 年

上の２つの地図を比べて、違い（54 年間の変化）を探してみよう！

○　堀金小学校は、昭和 22 年の地図でも今と同じ位置にあって、その周囲の様子もそう大きくは変わっていないね。地図に示(しめ)されたそれ以外の範囲(はんい)でも、住宅地については、昔の集落がそのままの形で残っていて、農地の中に新たに住宅地がつくられた様子があまり見られないね。

○　大きな変化は、地図の真ん中を南北に走る安曇広域農道ができたこと、そして、地図の北西方向に大きな工場団地(だんち)ができたことだね。農道沿いに今は大きな店舗もあるけれど、平成 13 年の地図にはまだないようだ。この辺りは、昔は拾ヶ堰(じっかせぎ)より西側一帯が桑畑(くわばたけ)で、今のような田んぼもなくて、農地の様子もだいぶ変わったんだね。

明北小学校・明南小学校周辺

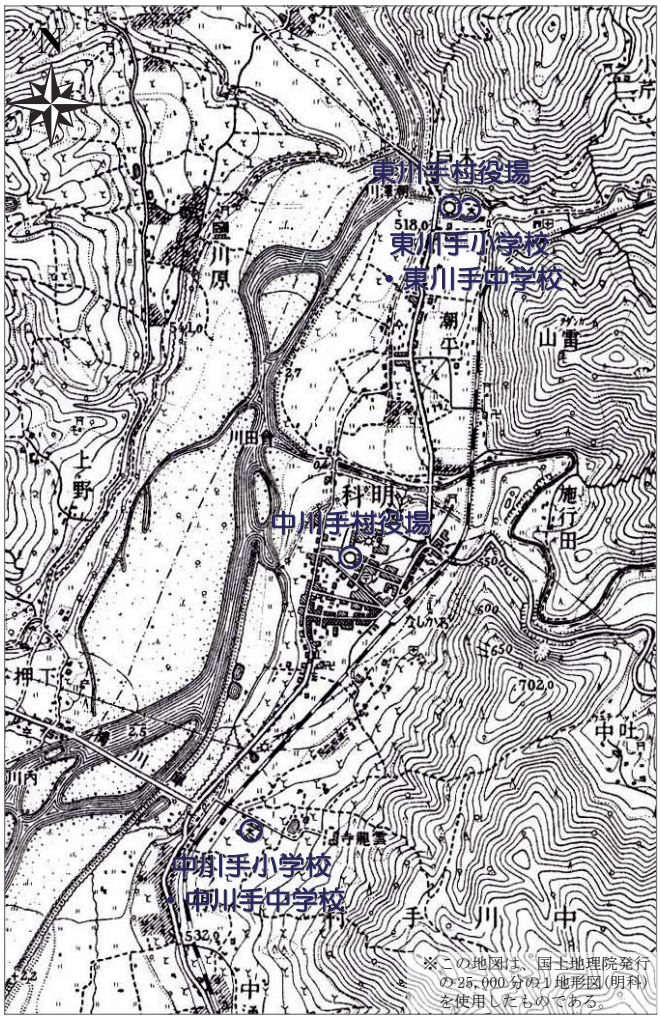


図 11-①　昭和 22 年

図 11-②　平成 13 年

上の２つの地図を見比べて、違い（54 年間の変化）を探してみよう！

- ○　昭和 22 年の地図で、現在の明北小学校の少し北側にあるのは「東川手小学校」、明南小学校とほぼ同じ位置にあるのは「中川手小学校」で、それぞれ別の名前の小学校だったんだ。
- ○　国道 19 号の道すじを昭和 22 年の地図で見ると、木戸橋の辺りや明科駅と龍門寺の間など、所々で今と違っているのがわかるかな。実はＪＲ篠ノ井線も、明科駅から北側にトンネルができて、線路の位置が変わっているんだ。昔、線路が通っていたところは、現在ウォーキングコースになっているよ。
- ○　犀川の東側の市街地も大きく広がっているけど、犀川の西側にも住宅団地ができたり、工場団地ができたり、だいぶ変わったね。

2．交通網の整備

現在、わたしたちが毎日当たり前のように使っている鉄道や道路は、いつ頃つくられたのでしょうか？

○大正時代にはすでにあった２本の鉄道

安曇野市内を通る２本の鉄道（ＪＲ大糸線とＪＲ篠ノ井線）は、駅を含めて、昭和の時代に入る前には、すでにできていました。

○戦後、整備が進んだ道路

道路は、道すじとしてはもともとあったものもたくさんありますが、アスファルトなどで舗装されるようになったのは、ほとんどが戦後です。

この舗装化に合わせ、道路の幅も広げられたり、木橋からコンクリート橋への架け替えも進められました。また、長野自動車道をはじめ、それまで全く道すじがなかったところにも、新たに道路がつくられました。

かつては木橋だった光橋

こうして整備された道路が、現在の安曇野市のくらしや産業を支え、観光や交流などにも役立っています。

表１　地域をつなぐ主な道路の整備の歴史

年代	整備内容
昭和 50 年代	・安曇広域農道の全線（三郷一穂高間）が開通する。（昭和 56 年） ・大規模自転車道路としてあづみ野やまびこ自転車道※1（穂高一塩尻市宗賀間）の整備が始まる。（昭和 57 年）
昭和 60 年代	・長野自動車道の岡谷ICー豊科 IC 間が開通する。（昭和 63 年）
平成元年～平成９年	・長野自動車道の豊科 ICー更埴IC 間が開通する。（平成５年） ・高瀬川沿いに堤防道路※2（穂高一大町市常盤間）が開通する。（平成８年）
平成 10 年代	・国道 147 号（高家バイパス）の全線が開通する。（平成 19 年）
平成 20 年代	・長野自動車道の梓川サービスエリアに梓川スマート IC が設置される。（平成 22 年） ・長野自動車道の「豊科 IC」が「安曇野 IC」に名称変更される。（平成 24 年）

※1　正式名称は、「長野県道 441 号穂高松本塩尻自転車道線」です。

※2　「オリンピック道路」とも呼ばれ、正式名称は、「長野県道 306 号有明大町線」です。

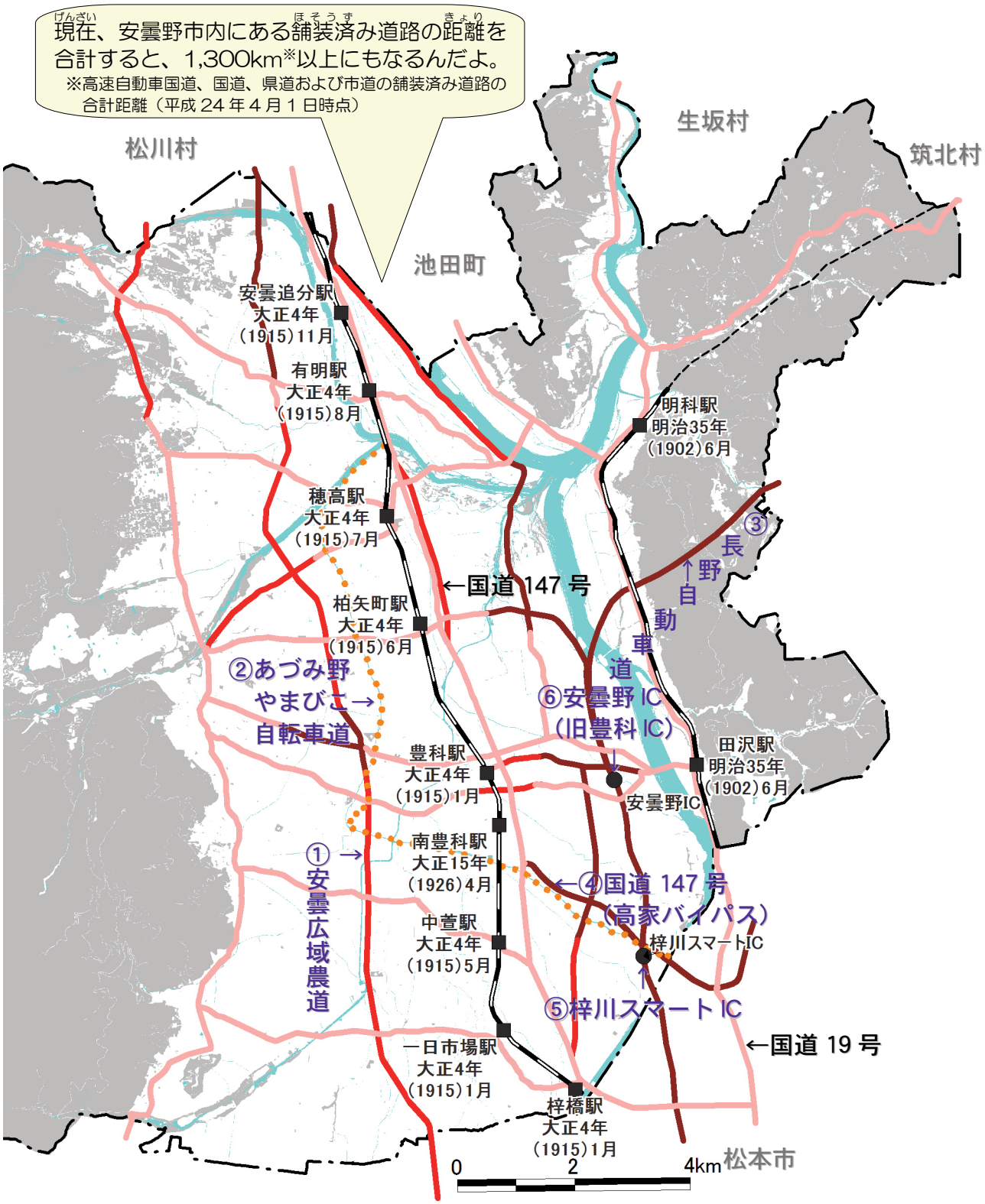


図 12　戦後に新たにつくられた道すじ

安曇野市内には全部で 11 か所も駅があるんだよ。
ＪＲの駅の数としては県内の市町村の中で２番目（長野市と同じ）に多いんだ。ちなみに 1 位は飯田市で 15 か所。

- JRの駅（上の図のカッコ内は駅が設置された年月）
- 高速道路のIC（インターチェンジ）
- 昭和20年代前半の地図で確認できる道すじ
- 昭和20年代前半の地図では確認できず、昭和50年代前半の地図で確認できる道すじ
- 昭和50年代前半の地図では確認できず、平成10年代前半の地図で確認できる道すじ

つまり、昭和 20 年代前半にはなかった道すじということだね。

つまり、昭和 50 年代前半にはなかった道すじということだね。

安曇広域農道（左の図の①）

三郷、堀金、穂高の３地域をつなぐ道路で、この道路上に安曇野市内で最も自動車交通量の多い地点があります。

あづみ野やまびこ自転車道（左の図の②）

県内でも数少ない自転車専用の道路（サイクリングロード）で、塩尻市から穂高地域まで約 40km の長さがあります。

長野自動車道（左の図の③）

長野市や、東京、名古屋など遠くにある大都市へ、より早く行けるようにしてくれた道路です。

国道 147 号高家バイパス（左の図の④）

奈良井川と梓川を「アルプス大橋」で越えて、松本市と豊科地域の行き来をしやすくしてくれた道路です。

梓川スマート IC（左の図の⑤）

ETC搭載車（車長 12m 以内）に限り、長野自動車道の梓川サービスエリアで出入ができるようになりました。上り線の出入口は安曇野市側に、下り線の出入口は松本市側にあります。

安曇野 IC（左の図の⑥）

長野自動車道の「豊科 IC」から「安曇野 IC」に名称変更され、安曇野の玄関口であることがわかりやすくなりました。

3．くらしの発展

（1）人口の変化

○戦後、どのくらい人口が増えたの？

現在の安曇野市の人口は約 10 万人で、平成 22 年の調査のときの正式な数字は 96,479 人です。

豊科、穂高、三郷、堀金、明科の旧 5 町村が誕生した時代の昭和 30 年の調査では、5 町村の人口の合計は 68,908 人でした。

では、昭和 30 年から平成 22 年までの 55 年間に、安曇野市の人口は一体どのくらい増えたのでしょうか？計算してみましょう！

＜計算式＞

〔平成 22 年の人口〕		〔昭和 30 年の人口〕		〔55 年間で増えた人口〕
96,479 人	－	68,908 人	＝	27,571 人

○人口の増え方は時代によって違う？！

上の計算によると、戦後から現在までに約 3 万人近く人口が増えたことになります。しかし、年を追ってみると、ずっと増え続けてきたわけではありません。時代ごとの増え方の違いを下の図で見てみましょう。

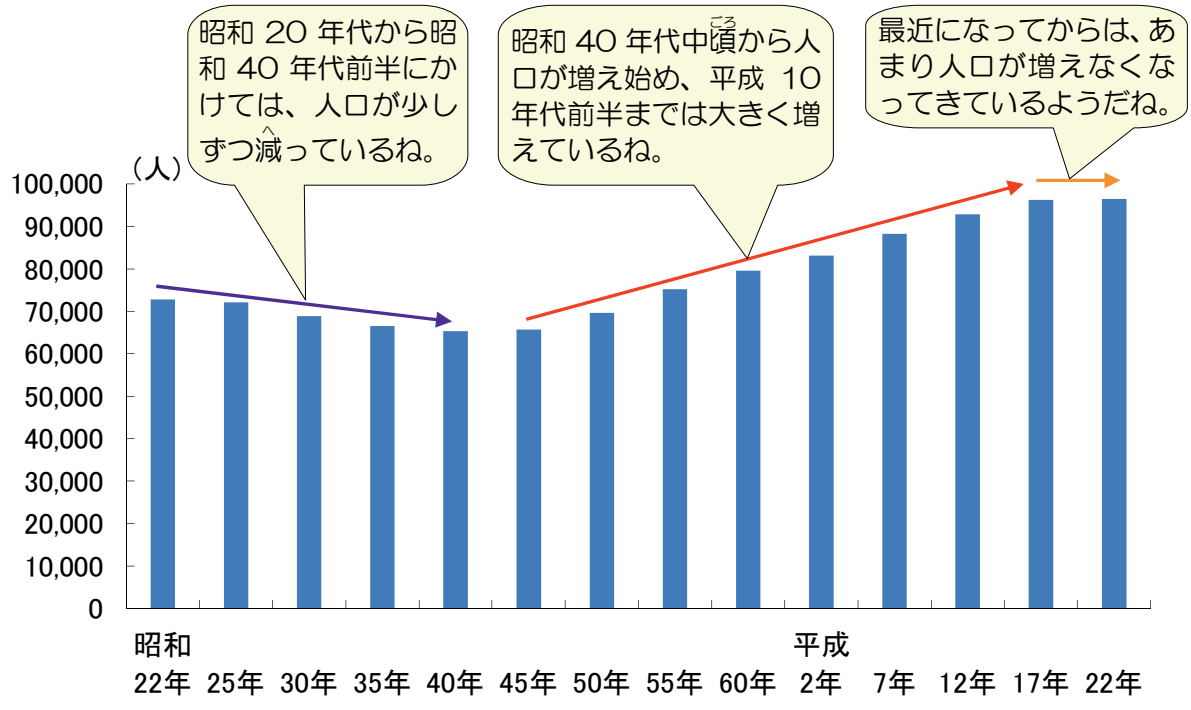
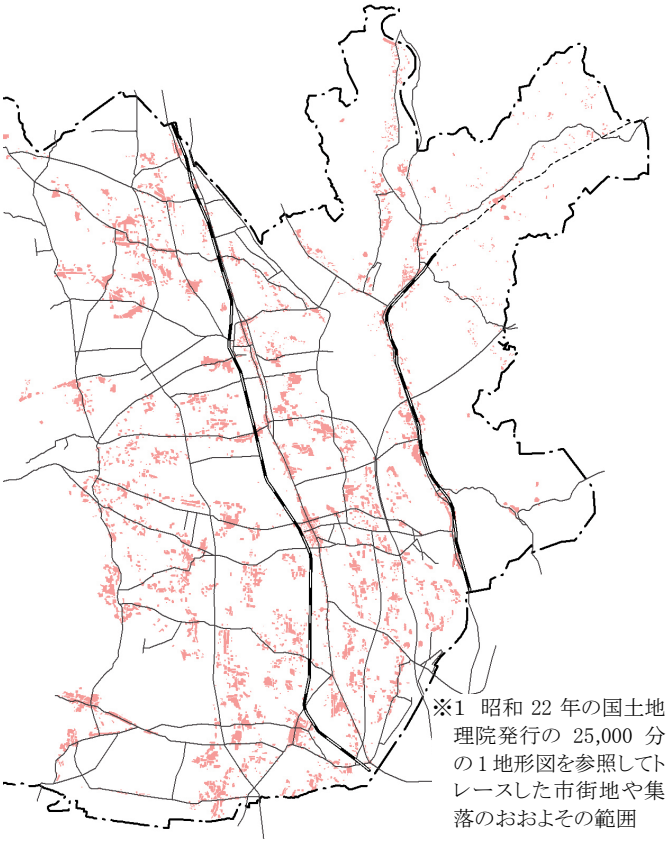


図 13　昭和 20 年代前半から現在までの安曇野市の人口の変化

（2）まちのかたちと住宅地の広がり

人々がくらすためには、住む家や買い物をする場所、働く場所などが必要です。前のページで見たように安曇野市の人口が増えたということは、その間に、まち（住宅、お店、工場などのまとまり）が大きくなってきたということになります。

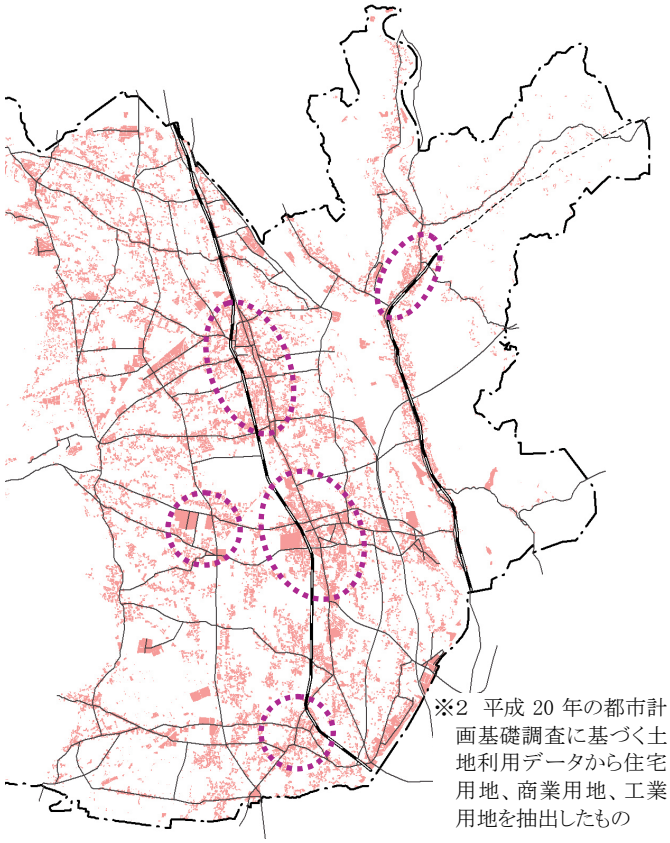
戦後、安曇野市のまちのかたちがどのように変わってきたのか、下の図を見比べて、その特徴を見てみましょう。



※1　昭和 22 年の国土地理院発行の 25,000 分の 1 地形図を参照してトレースした市街地や集落のおおよその範囲

それぞれの年代のおおよそのまちのかたち

図 14-①　昭和 22 年のまちのかたち※1



※2　平成 20 年の都市計画基礎調査に基づく土地利用データから住宅用地、商業用地、工業用地を抽出したもの

現在の道路　現在の鉄道

図 14-②　平成 20 年のまちのかたち※2

まちのかたちはどのように変わったかな？

○　旧５町村の市街地が大きくなっているのがわかるかな。

○　市街地以外でも、点々とあった小さなまちが大きくなっているところや、新しくまちができているところもたくさんあるね。

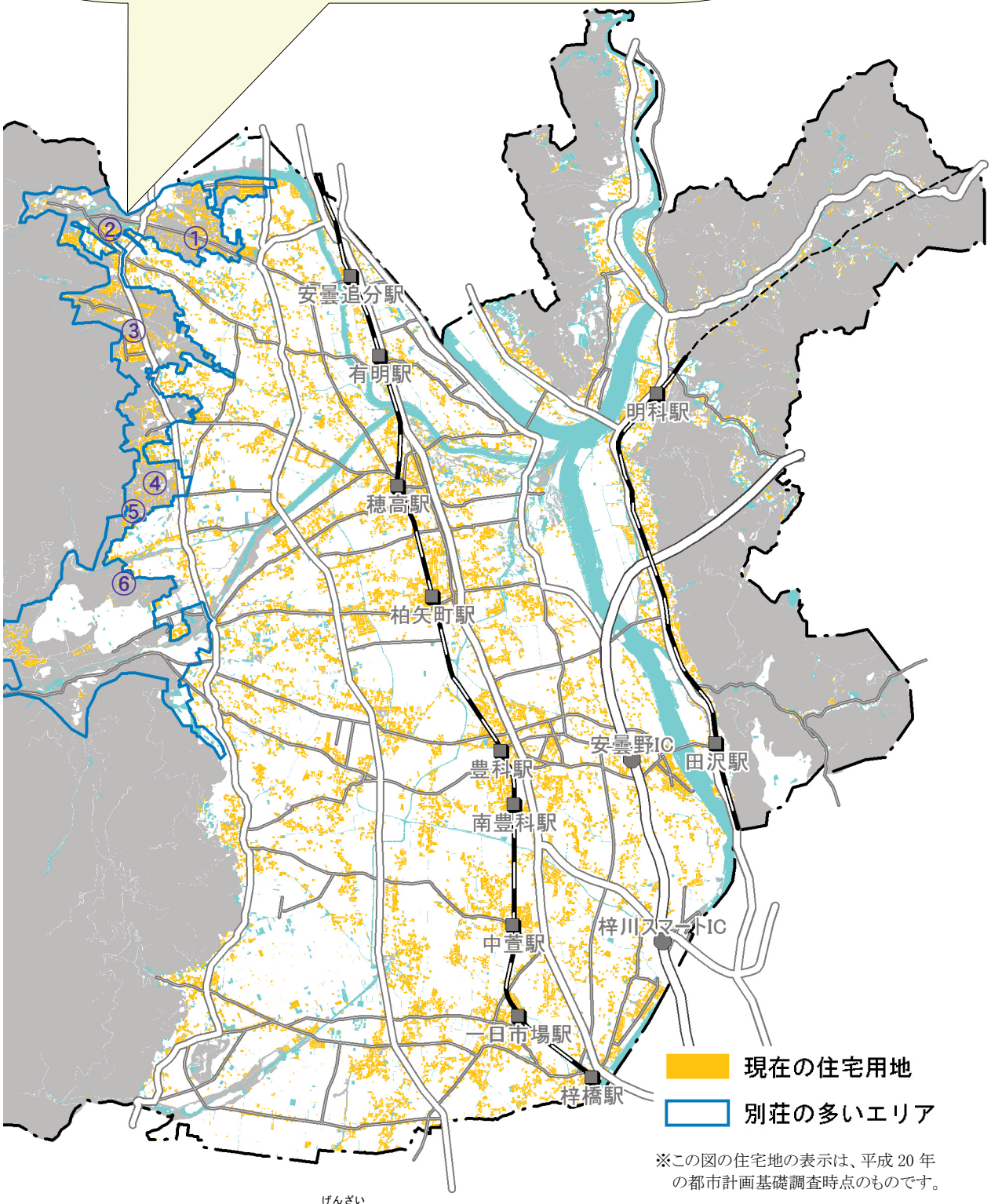
次のページの図で、現在の住宅地の広がりや、普通の住宅とは少し異なる別荘の多いエリアを確認してみましょう。

【別荘の多いエリア】

このエリアは、アカマツなどの林に囲まれ、他とは少し違う雰囲気をもつ場所で、別荘として建てられた住宅が多いんだ。

この場所に別荘がつくられるようになったきっかけの一つは、昭和 40 年頃から始まった「学者村」と呼ばれる別荘開発で、当時、都会に住む大学の先生やお医者さん、作家さん専用の別荘としてつくられたことから、その名がつけられているんだ。学者村と名のつく別荘地は、全部で６つあるんだよ。

① 鈴玲ヶ丘学者村　② つつじヶ丘学者村　③ 天満沢学者村
④ 忍ヶ丘学者村　⑤ 鎧塚学者村　⑥ 猪鹿の牧学者村



※この図の住宅地の表示は、平成 20 年の都市計画基礎調査時点のものです。

図 15　現在の住宅地の広がりと学者村の位置

（3）公園の整備

わたしたちがいつも、友達と遊んだり、運動をしたり、家族とキャンプをしたりして楽しんでいる公園は、いつ頃できたのでしょうか？

下の図は、国や県、旧（きゅう）５町村が計画的につくってきた公園を、開園した年代ごとに色分けした地図です。これをみると、ほとんどの公園が、昭和50年代以降（いこう）に整備されてきたことがわかります。

次の20、21ページで、現在安曇野市にある公園の中でも、面積の大きな公園をいくつか紹介（しょうかい）します。

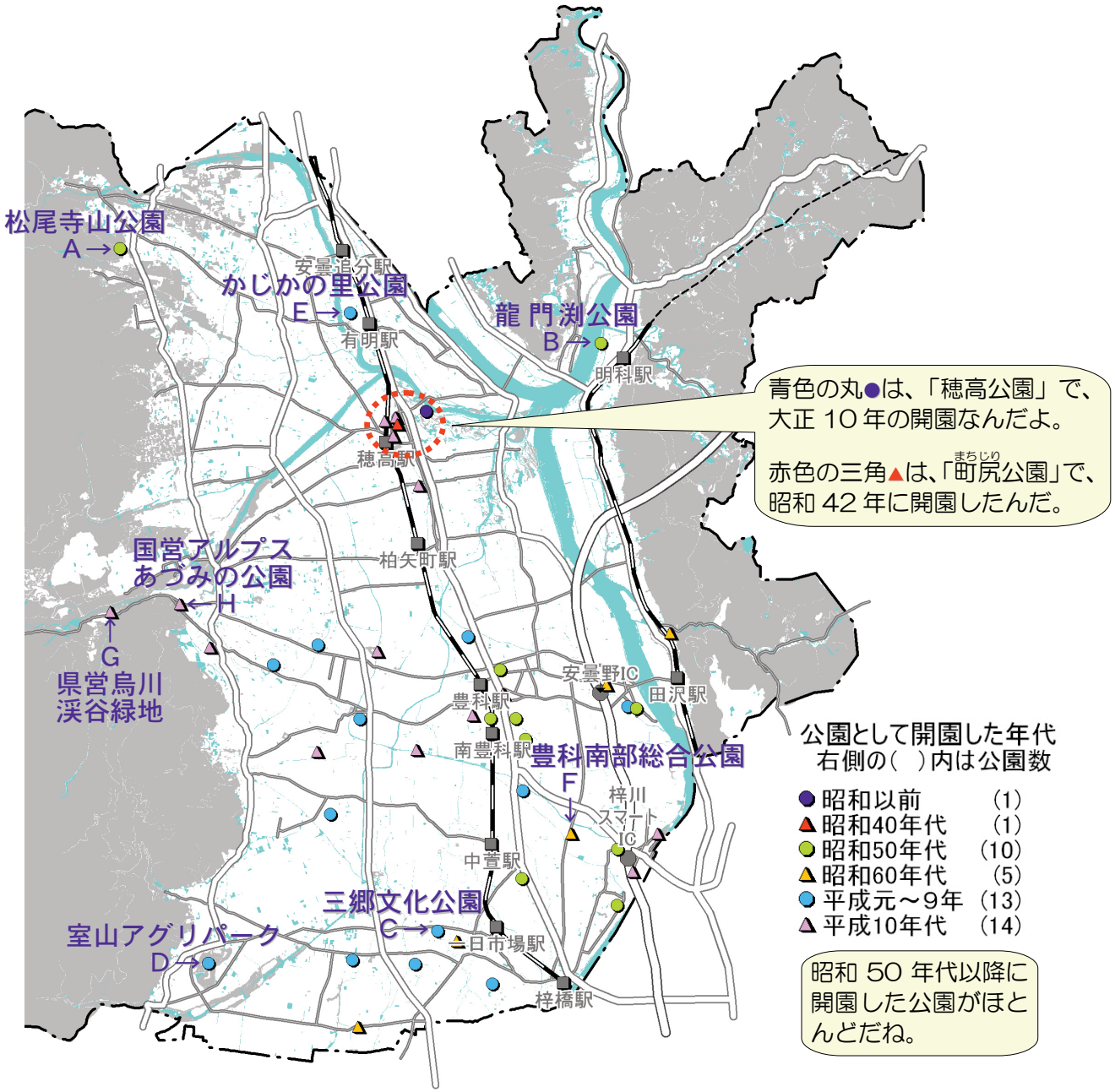


図16　安曇野市にある主な公園の位置と開園した時代

表２−①　安曇野市にある面積の大きな主な公園（次のページに続く）

時代	整備された公園の内容	写真
昭和 50 年代	松尾寺山公園　図 16（19 ページ）のＡ ①公園のある地域：穂高地域 ②開園した年：昭和 56 年 ③開園している面積：約 4.4ha※ ④公園の特色 本堂が国の重要文化財である松尾寺の周りにつくられた公園。花の名所で、約 1,000 株あるといわれるボタンや、長さ 20m の藤棚などがある。	
	龍門渕公園　図 16（19 ページ）のＢ ①公園のある地域：明科地域 ②開園した年：昭和 58 年 ③開園している面積：約 3.6 ha ④公園の特色 公園内を流れる前川ではカヌーが楽しめる。この公園の北側には、「あやめ公園」があり、６月には、あやめ祭りが開かれている。	
	三郷文化公園　図 16（19 ページ）のＣ ①公園のある地域：三郷地域 ②開園した年：昭和 59 年 ③開園している面積：約 4.2ha ④公園の特色 テニスコートや体育館、グラウンドなどのスポーツ施設がある公園で、色々なスポーツの大会も開かれる。入口には大きなユリノキの並木道がある。	
平成 元年〜9 年	室山アグリパーク　図 16（19 ページ）のＤ ①公園の場所：三郷地域 ②開園した年：平成４年 ③開園している面積：約 30ha ④公園の特色 室山につくられた公園で、山頂の広場には、伝説の巨人「でいだらぼっちゃ」の展望台があり、安曇野市を眺めることができる。	

※1ha（ヘクタール）とは、100m×100m の面積のこと

表２−②　安曇野市にある面積の大きな主な公園（前のページの続き）

時代	整備された公園の内容	写真
平成 元年～9 年 （続き）	かじかの里公園　図 16（19 ページ）の E ①公園の場所：穂高地域 ②開園した年：平成 4 年 ③開園している面積：約 2.8 ha ④公園の特色 きれいな川にすむ魚、カジカにちなんだ水辺の多い公園。広い芝生広場があり、キャンプもできる。	
	豊科南部総合公園　図 16（19 ページ）の F ①公園の場所：豊科地域 ②開園した年：平成 5 年 ③開園している面積：約 8.5 ha ④公園の特色 広い芝生広場、遊具、テニスコート、マレットゴルフ場などがあり、色々な遊びや運動ができる。	
平成 10 年代	県営烏川渓谷緑地　図 16（19 ページ）の G ①公園の場所：堀金地域･穂高地域 ②開園した年：平成 14 年 ③開園している面積：約 63 ha ④公園の特色 県が設置した公園で、現在、安曇野市内で最も広い面積をもつ。川での水遊び、森の中の散策など自然の中での遊びが楽しめる。	
	国営アルプスあづみの公園　図 16（19 ページ）の H ①公園の場所：堀金地域･穂高地域 ②開園した年：平成 16 年 ③開園している面積：約 27 ha ④公園の特色 国が設置した公園で、現在も公園を広げる工事が進められおり、最終的には約 94ha の面積になる計画。池や広場のほか、展示室など室内で楽しめる施設もある。	

（4）くらしを支えるその他の施設

道路や公園だけはなく、わたしたちの身の回りには、くらしを支える様々な施設があります。どのようなものがあるのか見ていきましょう。

① 上水道施設

右の写真にあるような形の建物を、見たことがありますか？

これは、「配水池」と呼ばれる上水道施設の一つで、わたしたちが毎日使う水道水を貯めて、各家庭に送り出すための施設です。

高家配水池

上水道施設は、戦後まもなく整備が進められ、昭和 40 年代までには、ほとんどの家庭で水道水が使えるようになりました。

出典：安曇野市水道ビジョン

図 17　現在の安曇野市の上水道施設の位置

② 下水処理施設

アクアピア安曇野

右の写真にある白い大きな建物が、何かわかりますか？

これは、「アクアピア安曇野」と呼ばれる下水道処理施設にある建物の一つです。

下水道処理施設とは、わたしたちが使った水を集め、きれいにして川に戻すための施設で、各家庭からこの施設までつながる下水道管は、豊科、穂高、三郷、堀金の旧４町村と梓川村（現在の松本市）が、平成３年から共同で整備を始めました。現在でも、道路の下に下水道管を通す工事の様子を、たびたび目にすることがあります。

③ ダム

黒沢ダム

右の写真は、昭和48年に、三郷村の黒沢川下流で起きる水害を防ぐために、その上流に建設された「黒沢ダム」の湖面です。

このダムは、水害を防ぐだけでなく、飲み水を得るためにも使われています。

④ 排水路

あづみ野排水路

右の写真は、自然の河川ではなく、平成13年から平成17年にかけて整備された「あづみ野排水路」と呼ばれる人工の排水路です。

この排水路は、主に農地を水害から守るためにつくられた施設で、上流から三郷、堀金、豊科の順に３地域を流れ、万水川につながっています。

道路が舗装されたり、農地が住宅地に変わると、地下に浸み込む雨水が減り、大雨の時に洪水が起きやすくなります。排水路は、そうしたわたしたちのくらしの変化によって、必要になった施設でもあるのです。

4．産業の発展

（1）農業

「農業」とは、農地から農産物をつくる産業です。安曇野市の農地と言えば、お米、そば、わさび、りんごなどをつくる田畑を思い浮かべますが、昔は、桑の葉を蚕に食べさせて繭（衣服の材料となる生糸のもと）をつくる「養蚕業」が盛んで、桑畑がたくさんありました。

市内各地に広がっていた桑畑

右下の図を見てみましょう。昭和 20 年代前半に桑畑だった農地を茶色く塗った地図です。現在の田や畑も昔は桑畑だったところがたくさんあります。茶色の部分をよくみると、拾ヶ堰よりも西側に桑畑がたくさんありました。なぜでしょうか？

犀川より西側は、扇状地と呼ばれる地形上にあり、扇状地の真ん中のあたりは、もともと水が少ないところでした。江戸時代、そこに堰と呼ばれる何本かの水路がつくられたことで、それらの水路より標高の低い方（東側）には水が行き渡るようになり、お米をつくれるようになりました。

しかし、拾ヶ堰より標高の高い西側には、十分に水を得られる堰がなかったため、田より桑畑の方が向いていたというのが理由の一つです。

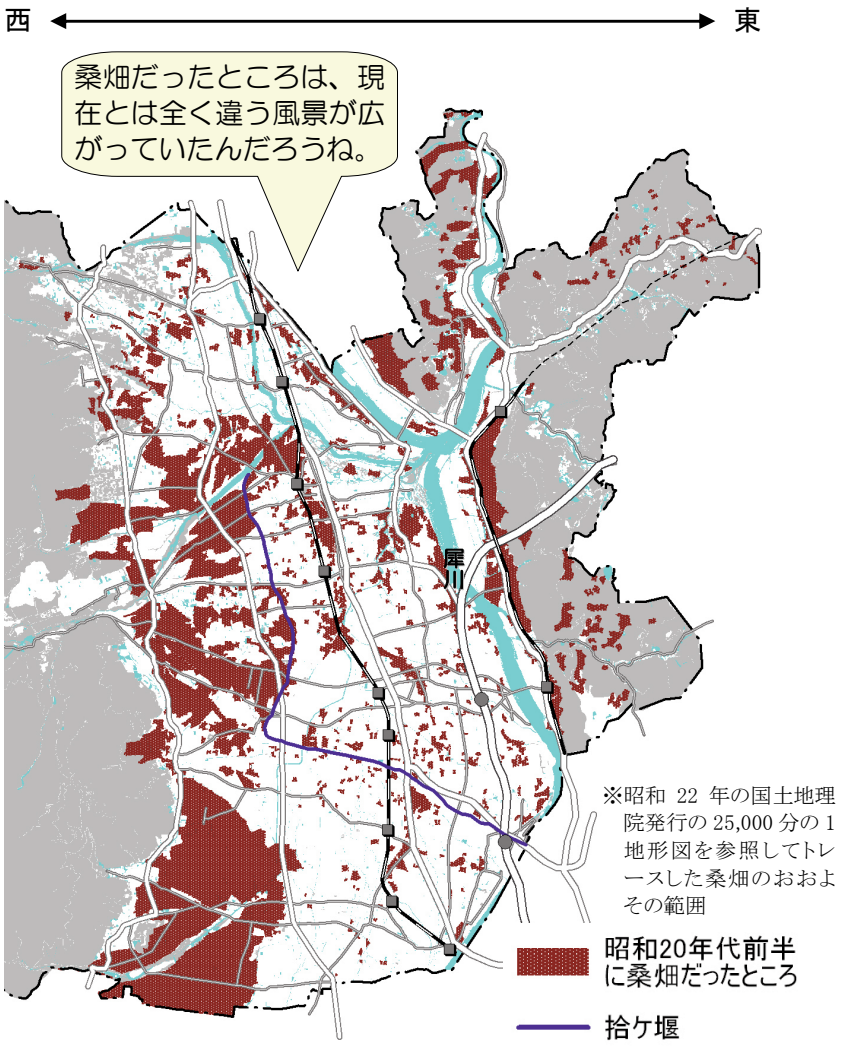


図 18　昭和 20 年代前半のおおよその桑畑の広がり

養蚕業の衰え

養蚕業は、製糸業（繭から生糸をつくる工業）とともに、昭和の始め頃までは、日本の産業の主役でした。

しかし、外国でより安い生糸がつくれられるようになったり、衣服の材料がナイロンなどの化学繊維に変わっていったことにより、養蚕業は次第に衰えていきました。

右のグラフからもわかるとおり、昭和 20 年代以降、養蚕を営む農家の戸数は年々大きく減っています。

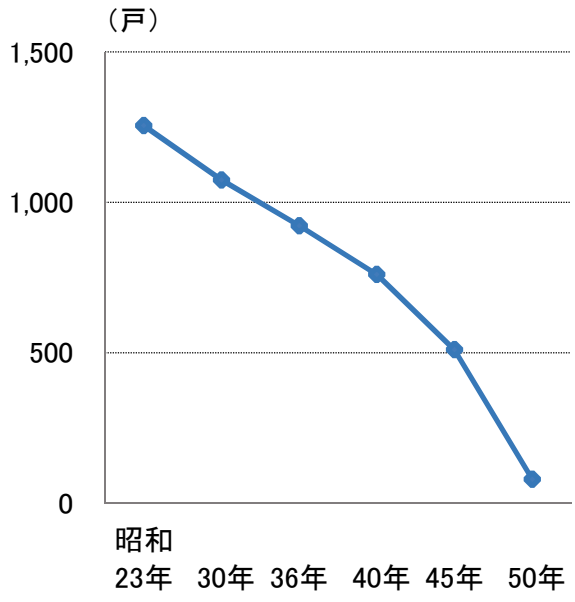
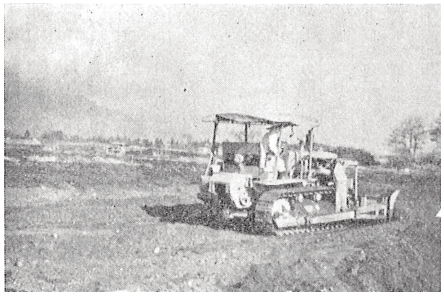


図 19　三郷村の養蚕農家戸数の変化

では、その養蚕のために必要とされていた桑畑は、その後、どのように変わっていったのでしょうか？その変化を含めて、安曇野市の農業の歴史や特色を農作物ごとに見ていきましょう。ここでは、表紙にも出ている安曇野を代表する農産物にちなんだ応援キャラクター、お米の「らいすん」、そばの「そばっぴ」、わさびの「わさっぴ」、りんごの「あぷふーる」も登場します。

① お米　～安曇野の田園風景をつくる農産物～

日本人の主食であるお米は、食料が不足していた戦後、特に生産量を増やすことが求められた農産物でした。それまで桑畑だったところも、田として切り開かれるようになりました。このことを「開田」といいます。



出典:『堀金村誌』
堀金村の開田の様子
（昭和 39 年）

お米づくりに必要な水を十分に得られない場所では、地下からポンプで水をくみ上げたり、少し土を掘ると石がたくさん出てくるような場所では、それらを取り除いたり、田として利用するためには、大変な苦労がありました。

農業の近代化

○農業機械の登場

昭和 30 年代には、農業の機械化が進み、田起こしなど、それまで人の手や、牛や馬の力に頼っていた作業は、より少ない労力でできるようになりました。

出典:『明科町史』
トラクターによる作業の様子

○農地の改良

農業の機械化が進む中、より作業しやすい農地にするためには、農地の形を四角く整え、１つの区画の面積をそれまでよりも広くする必要がありました。

現在、多くの農地の基本となっている 30m×100m の区画に改良する工事は、昭和 30 年代後半から始まりました。

昭和 45 年からは、この改良工事が「ほ場整備」と名付けられた県の事業として、各地の農地で進められました。

出典:『豊科町誌』
農地の改良工事の様子

出典:『豊科町誌』
改良後の農地の姿

○農業用水路などの整備

昭和 40 年代頃からは、農業に必要な水路などの整備が進められました。

かつて桑畑の多かった拾ヶ堰より西側の農地は、昭和 40 年から昭和 53 年の「国営中信平農業水利事業」や、昭和 42 年から昭和 62 年の「県営かんがい排水事業」により、梓川から水を引く水路が整備され、これに合わせてほ場整備も行われたことで、りんごやお米などがつくりやすくなりました。

出典:農林水産省 関東農政局パンフレットに加筆

図 20　現在も改修などの整備が行われている梓川から水を引く水路の広がり

減反政策の実施

○余り始めたお米

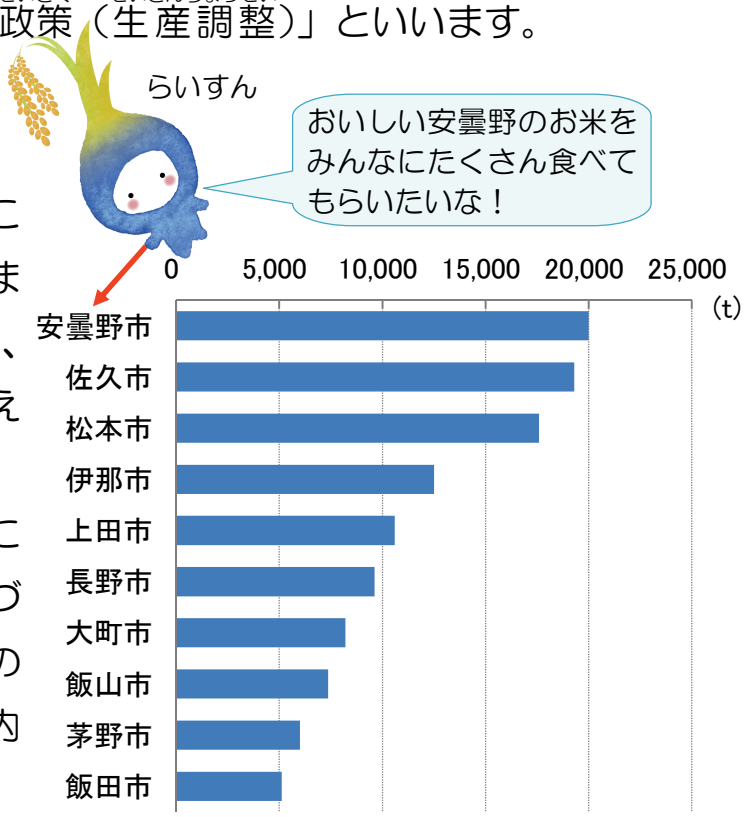
前のページで見たような農業の近代化の取り組みにより、お米の生産量は増えましたが、食生活が変わり、パンや麺類などお米以外のものも多く食べられるようになり、次第にお米が余るようになってきました。

そうした中で、昭和 45 年に、国はお米をつくる田の面積を減らす政策を打ち出しました。これを「減反政策（生産調整）」といいます。

○量より質の高い米づくり

現在は、お米を大量につくることは求められない時代になりましたが、一方で値段が高くても、おいしいお米を求める人は増えています。

安曇野市では、そうした人々にも選ばれる、より品質の高い米づくりに取り組みながら、お米の収穫量は、合併後、ずっと県内第１位となっています。



資料：関東農政局ホームページ

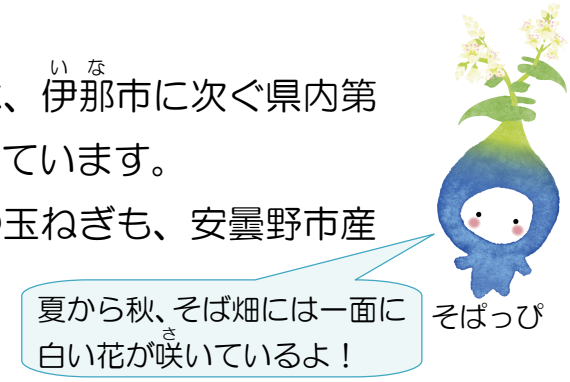
図 21　県内市町村別のお米の収穫量
（平成 23 年産水稲市町村収穫量）

○お米から他の農作物へ

生産調整によって、お米をつくれなくなった農地では、そばや大豆、麦、玉ねぎ、アスパラガスなど別の農産物をつくるようになりました。このことを「転作」といいます。

なかでも、安曇野市のそばの生産量は、伊那市に次ぐ県内第２位で、県内有数のそばの生産地となっています。

また、信州生まれの黒豆「信濃黒」や玉ねぎも、安曇野市産のものが有名になりつつあります。



② わさび　～北アルプスの湧き水が生んだ農産物～

わさびは、お寿司やお蕎麦など日本の料理には欠かせない薬味の一つです。わさび田の景色を目当てに観光客が訪れるほど有名な安曇野市の農産物、わさびの生産について見てみましょう。

わさび生産の始まり

○わさび生産が盛んになった理由

わさび（水わさび）は、涼しい気候を好み、１年を通して水温が 13℃前後で、きれいな水が大量に湧き出る場所にしか生育することができません。

豊科、穂高、明科の３地域にまたがる三川合流部（犀川・高瀬川・穂高川が合流するエリア）は、北アルプスの湧き水がたくさん出る場所で、わさびを生育するために必要な条件がそろっていました。

穂高地域を中心に、明治の中頃には、すでにわさびの栽培が始まっていました。

安曇野市の「市の花」であるわさびの花

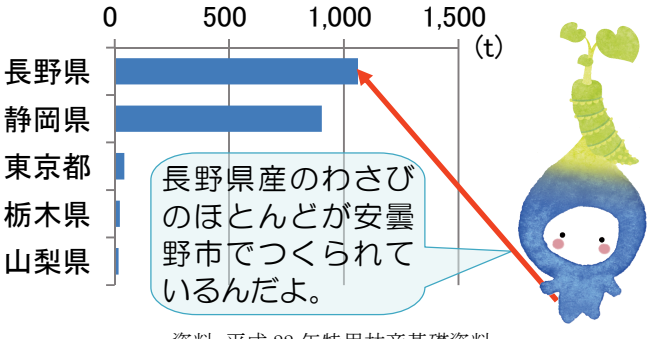
○大変な苦労の末に生まれたわさび田

日本で一番広い面積のわさび田をもつ「大王わさび農場」は、大正４年頃から開墾を始め、現在見られるような姿になるまで、約 20 年の歳月がかかったといわれています。１日平均200 人を雇って、地面を掘り下げたり、土砂を周りに積み上げたり、大変な苦労がありました。

現在のわさび生産

現在、長野県産のわさびのほとんどが安曇野市でつくられています。

水辺でとれる「水わさび」の生産量では、長野県が全国第１位です。



資料：平成 22 年特用林産基礎資料

図 22　都道府県別の水わさびの生産量

③ りんご　～安曇野の気候と土からおいしさが生まれた農産物～

長野県が全国で２番目に生産量の多いりんご。安曇野市は、その県内のりんごの生産量で第４位※です。安曇野市を代表する農産物の一つであるりんごの生産について見てみましょう。

※平成 18 年産作況調査（果樹）

桑畑からりんご畑に

りんご生産の始まりは大正時代で、現在の安曇野市の５つの地域で最もりんご生産の盛んな三郷地域では、小倉村に初めてのりんご園ができました。

小倉村は、日当たりのよい扇状地にあり、おいしいりんごができる条件のそろった場所でした。昭和 20 年代前半までは、桑畑の多かった場所ですが、養蚕業の衰えや戦後のりんごブームの中で、りんごをつくる農家が増え、桑畑はりんご畑へと変わっていきました。

りんごの生産が増えるまで

梓川から水を引く農業用水路などの整備は、お米だけではなく、りんごの生産量を増やすことにも大きく役立ちました。

出典:『わたしたちの安曇野』
スプリンクラーによる水まきの様子

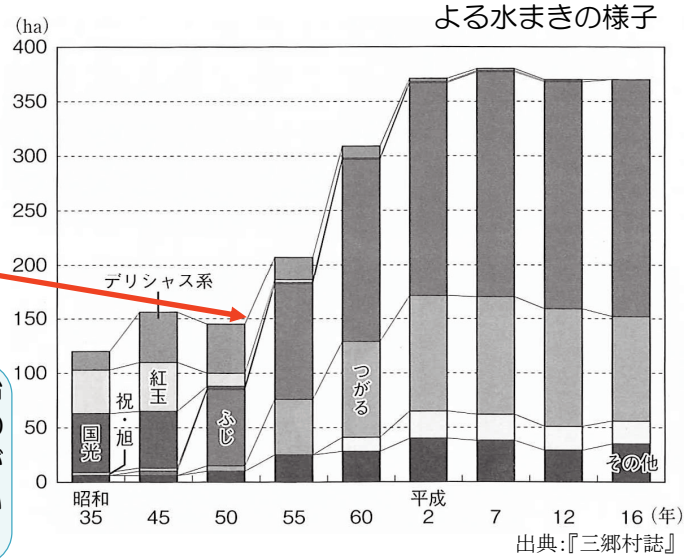
昭和 50 年頃からは、「わい化栽培」といって、収穫や手入れのしやすい背丈の低いりんごが多くつくられ始め、りんごをつくる農地の面積も大きく増えていきました。

また、つくられるりんごの品種も変わってきました。

品質、味ともに評価の高い安曇野のりんごは全国に出荷され、安曇野市を代表する農産物の一つとなっています。

あぷふぃーる

わい化栽培が始まった昭和 50 年頃から面積が大きく増えているね。



出典:『三郷村誌』

図 23　りんごの品種と栽培面積の変化（三郷村）

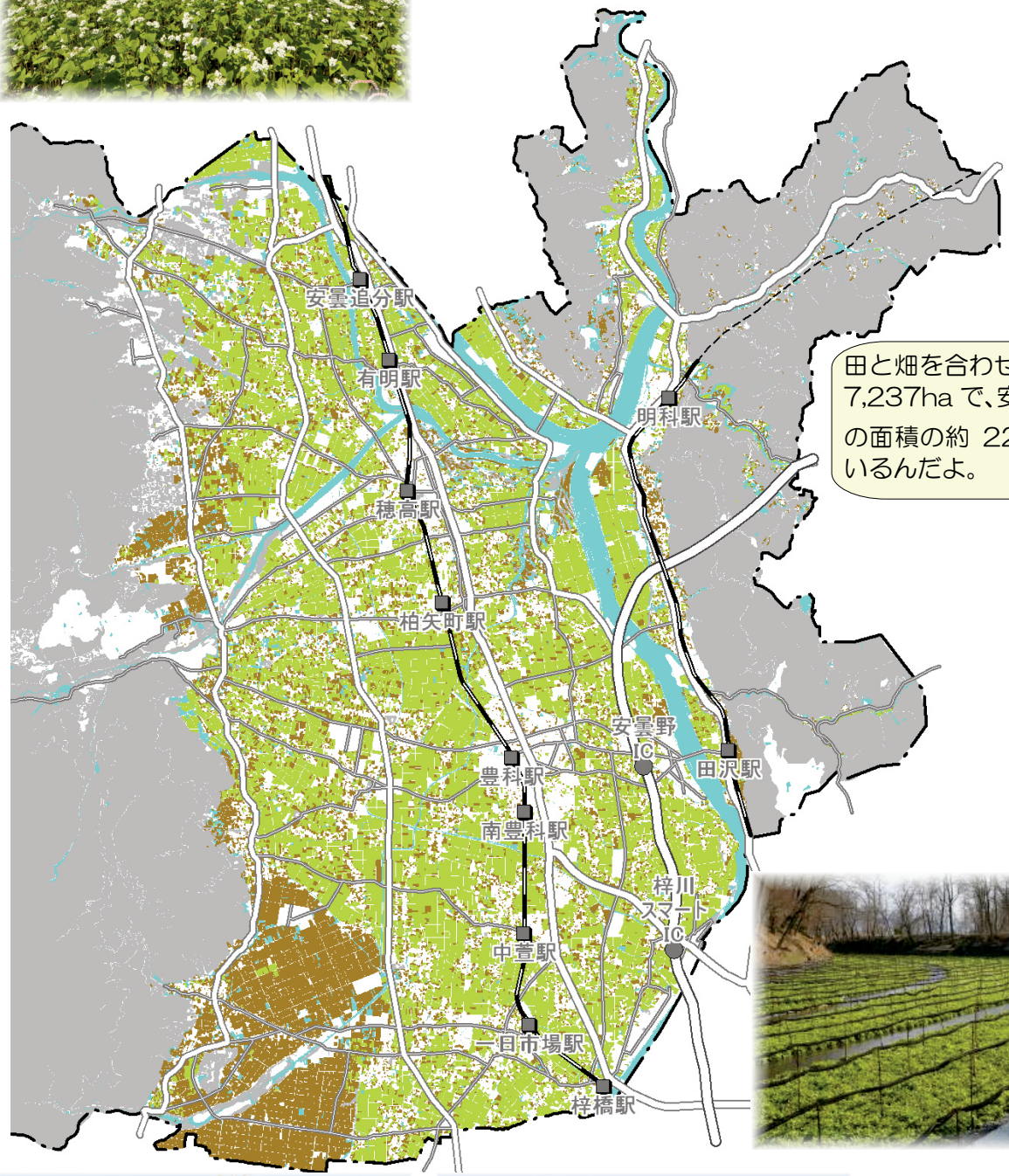
安曇野市全体の田の合計面積を、国民１人が１年間に食べるとされるお米の量※に表すと、約 40 万人分にもなるんだよ！

※この量のお米を生産するために必要な田の面積を約 125 ㎡として計算

田（市全体での合計面積：約5,070ha）

畑（市全体での合計面積：約2,167ha）

田と畑を合わせた面積は約 7,237ha で、安曇野市全体の面積の約 22%を占めているんだよ。



※この図の田畑の表示や面積は、平成 20 年の都市計画基礎調査時点のものです。

図 24　現在の安曇野市の農地（田や畑）の広がり

（2）畜産業

「畜産業」とは、牛や豚、鶏などの家畜を育て、乳や肉、卵などを生産する産業のことですが、安曇野市が県内でも有数の畜産業の盛んなまちであることを知っていましたか？

わたしたちが毎日のように口にする牛乳、肉や卵を使った料理、その中には地元、安曇野産のものがたくさんあるはずです。

昭和 30 年代に増えた畜産農家

安曇野市の畜産業は、明治時代から始まっていましたが、畜産農家の数が増えたのは昭和 30 年代です。

昭和の始め頃から昭和 30 年代にかけて、長野県が、畜産業を始めるために必要な豚や牛を買うお金の一部を出す仕組みをつくったことで、畜産業を始める農家が増えていきました。

出典:『堀金村誌』

昭和 42 年につくられた
堀金村の小野沢牧場

現在も畜産業が盛んであることを表す数字

現在では、畜産農家の数は以前より減りましたが、一つの農家でたくさんの家畜を育てる「多頭飼育」が行われるようになっています。下の表で、販売目的で育てられている家畜の数をみると、安曇野市は、牛（乳用・肉用）、豚、鶏（採卵用）が、いずれも県内トップ 10 に入っています。

表３−①　乳用牛の数

順位	市町村	頭数
1	南牧村	2,649
2	飯田市	1,816
3	松本市	1,647
4	伊那市	1,514
5	富士見町	1,154
6	箕輪町	978
7	佐久市	943
8	信濃町	877
9	安曇野市	851
10	南箕輪村	823

表３−②　肉用牛の数

順位	市町村	頭数
1	飯田市	2,652
2	佐久市	2,566
3	松本市	2,004
4	立科町	1,876
5	木曽町	1,115
6	上田市	1,093
7	安曇野市	1,091
8	中野市	817
9	高森町	742
10	東御市	685

表３−③　豚の数

順位	市町村	頭数
1	飯田市	11,370
2	安曇野市	9,065
3	立科町	6,815
4	飯田市	6,665
5	上田市	4,060
6	佐久穂町	3,271
7	佐久市	3,100
8	飯山市	2,950
9	千曲市	1,780
10	小谷村	180

表３−④　採卵鶏の数

順位	市町村	羽数
1	松本市	351,250
2	伊那市	98,500
3	佐久市	88,491
4	小諸市	40,040
5	駒ヶ根市	23,165
6	上田市	20,763
7	飯田市	20,423
8	阿南町	12,093
9	安曇野市	511
10	小谷村	240

資料:2010 年世界農林業センサス

（3）林業

「林業」とは、木材を生産する産業のことです。木材は山林から切り出されますが、山林の面積は、安曇野市にどのくらいあるのでしょうか？

その辺りから、安曇野市の林業について見ていきましょう。

山林の広がりと山林から生み出されるもの

○安曇野市の山林面積

右の図の緑色の部分が山林です。その面積は約 198.8km^2 で、安曇野市の面積の約 60%が山林に覆われているということになります。

安曇野市の東西に広がる山林では、戦前から林業が盛んに行われてきました。

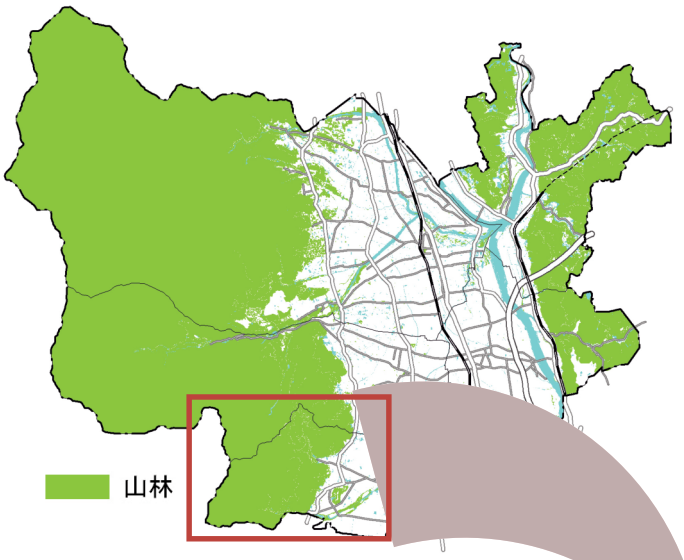


図 25　安曇野市の山林の広がり

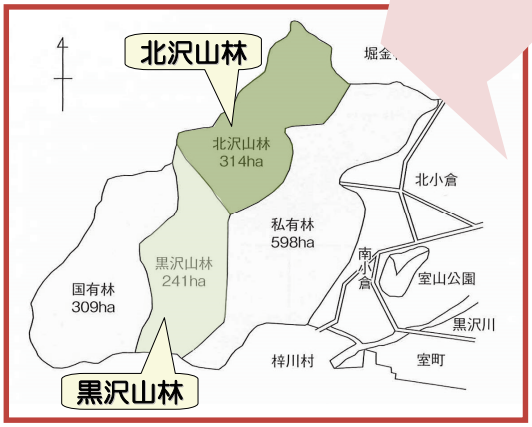
○燃料としての生産

かつての林業には、木材としての生産のほか、薪や木炭など燃料としての生産もありました。コナラやクヌギなど燃料になる木の多い山林は、「薪炭林」と呼ばれ、明治時代から昭和 20 年代頃までは、木炭の生産で多くの収入を得ていた地域もありました。

○木材生産とその他の役割

三郷地域にある「北沢山林」と「黒沢山林」は、よく整備された山林の一つで、木材生産の他、水源を守る林でもあります。

「北沢美林」とも呼ばれる北沢山林は、豊科町、三郷村、堀金村の旧 3 町村の組合林として管理されていました。



出典:『三郷村誌』に加筆

図 26　北沢山林と黒沢山林

戦後の林業の衰え

昭和 30 年代に入ると、くらしや産業に使われる燃料が、石炭や石油、天然ガスへと代わり、薪や木炭は必要とされなくなっていきました。

またその頃、木材も海外から自由に輸入できるようになり、価格の安い外国産の木材に対し、日本産の木材は売れなくなっていきました。

こうした理由により、安曇野市の林業も次第に衰えてきました。

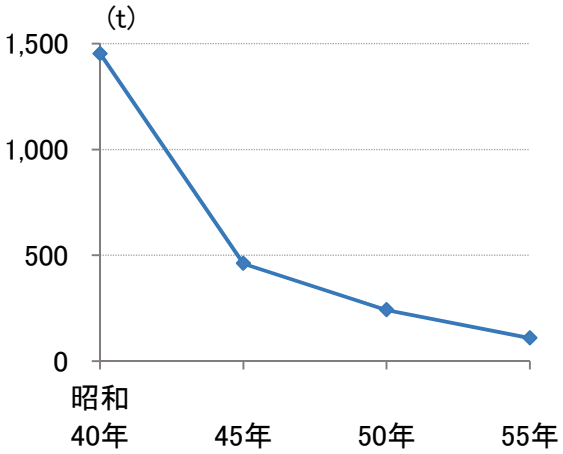


図 27　安曇野市とその周辺市町村※の木炭生産量の移り変わり

※松本市、塩尻市、東筑摩郡の各町村

林業を支える新たな取り組み

林業が衰え、山林に人の手が入らなくなると山林は荒れてしまい、木材などを生産する場として利用することが難しくなってしまいます。

そうした中で近年は、環境のことなどを考えて、地域の木材を見直し、その利用を広げる取り組みが見られます。

右の写真は、「ペレットストーブ」と呼ばれる暖房器具で、木材製品をつくるときなどに出る半端な木材を細かくして固めた「木質ペレット」を燃料としています。安曇野市ではこのストーブを購入するときにかかる費用の一部を出すことで、普及を進めています。

木材を燃料とするペレットストーブ

また三郷地域には、地域の木材を取引する県内最大の市場「中信木材センター」があります。これは、昭和 37 年に、「豊科市場」として豊科町につくられた後、昭和 47 年に三郷村に移転した施設です。

出典:長野県森林組合連合会ホームページ
中信木材センター

（4）水産業

「水産業」というと、海や大きな湖のあるところを思い浮かべるかもしれませんが、海や大きな湖のない安曇野市にも水産業があります。

昭和 10 年代まで行われていた水産業　～犀川に鮭がのぼってきた?!～

犀川の支流では古くから鮭漁が盛んで、江戸時代には年貢として鮭を納めていたという資料も残されています。

鮭は、産卵の時期に海から川を上ってくる魚ですが、昭和 10 年代に、犀川の下流に発電用のダムがつくられたことにより、安曇野市で鮭はとれなくなってしまいました。

大正時代からある「長野県水産試験場」の歴史

明科地域に、「長野県水産試験場」という施設があるのを知っていますか？

川や湖に魚を増やすための技術の研究などを行っている県の施設で、大正 15 年に、中川手村に「県営犀川ふ化場」として設置されたのが始まりです。

出典：長野県水産試験場ホームページ
長野県水産試験場

その後、何度か施設の名称を変えながら、安曇野市の水産業と深く関わってきました。

養殖中心の現在の水産業　～「信州サーモン」のふるさと安曇野～

現在、安曇野市で出荷されている魚のほとんどは、養殖用の池で人工的に育てられたものです。

その目玉は、何と言っても「信州サーモン」です。これは、長野県水産試験場が約 10 年間の歳月をかけて開発した魚で、平成 16 年に養殖することが認められました。

信州サーモンの養殖場

（5）工業

「工業」とは、くらしに必要な様々なものをつくり出す産業です。現在の安曇野市には、そうしたものをつくり出す工場がたくさんあります。

下の図を見てみましょう。紫色の部分が工場です。安曇野市全体の地図でも大きな工場や、工場がたくさん集まった工場団地があちこちにあるのがわかります。

次のページから、安曇野市の工業の発展の流れを見ていきましょう。

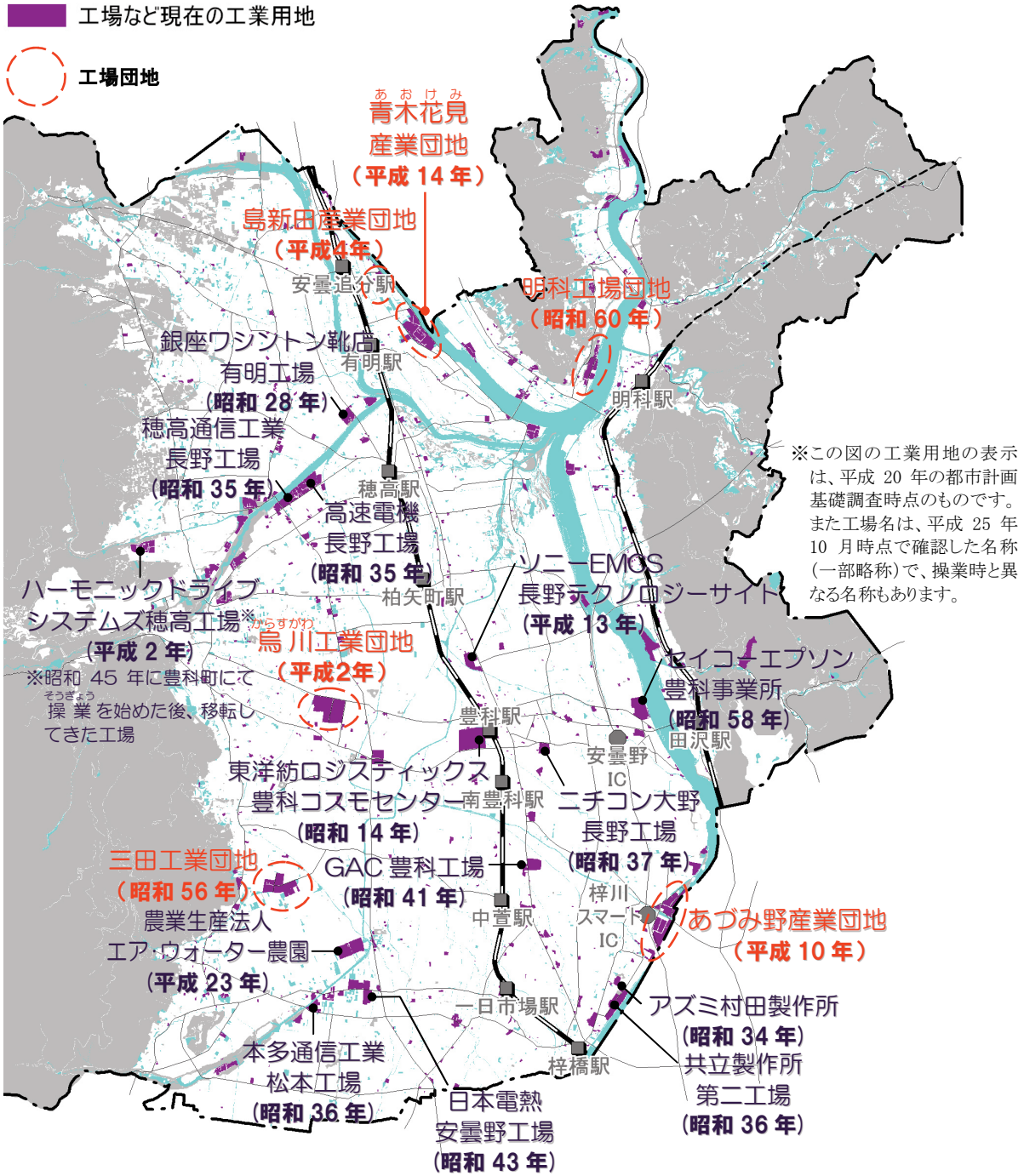
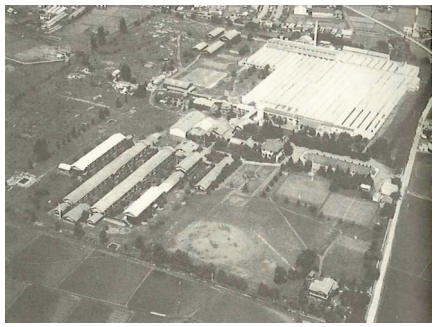


図 28　大きな工場や工場団地がある場所とその場所につくられた年

製糸業や製材業が盛んだった昭和 20 年代以前

明治から大正の時代は、製糸業が盛んで、繭から生糸をつくる製糸工場が各地にありました。大正３年には南安曇郡内に 10 工場あり、大正 10 年には、明科町に 300 人以上の従業員をもつ製糸工場がつくられました。また同じ頃、盛んだったのが製材業で、木を加工して板や柱に使う角材をつくる製材工場も数多くありました。当時、材木を運ぶのに利用されていた河川や鉄道の駅のある明科町には、明治 43 年に国営の製材所がつくられました。

製糸業は、昭和の時代に入る頃からは衰え始め、豊科町では、新たに工場を誘致して工業の発展を目指すようになりました。その結果、昭和 10 年代に、豊科駅の西側に大きな紡績工場（呉羽紡績･現在の東洋紡）を誘致することに成功しました。



出典：『豊科町誌』
呉羽紡績の豊科工場

工業の発展に力を入れ始めた昭和 30 年代

○町や村が工場の進出を後押し

昭和 30 年代、合併して誕生した旧５町村は、それぞれまちの発展のために、工場の進出を積極的に後押しすることに力を入れ始めました。

各町村は、「工場誘致条例」という工場を進出しやすくするための決まりをつくり、昭和 30 年代の後半から工場が増えてきました。

○新産業都市の指定

昭和 39 年３月３日に、国から「新産業都市」の１つとして、松本･諏訪地区（６市６町 11 村）が指定されました。

「新産業都市」とは、地方都市の産業の発展や人口の増加を目的に、積極的に工場などを整備するために国が指定した都市のことで、この指定が、安曇野市にたくさんの工場ができる大きなきっかけとなりました。

電機･機械関連の工場が増えていった昭和 40 年代

昭和 40 年代になると、人々の生活がより豊かになって、各家庭で、家電製品や自動車をもつようになってきました。これにより、安曇野市内には、くらしの中で使われる製品をつくる電機や機械に関係する工場が特に増えていきました。

当時建てられた工場の多くが、現在も市内にあり、操業を続けています。

出典:『三郷村誌』
通信機器の部品をつくる工場

出典:『わたしたちの安曇野』
ホットカーペットなどの
電機製品をつくっていた工場

食品加工業が発展した昭和 50 年代

昭和 50 年代からは、農業とつながる食品加工業も発展していきました。地元でとれた農産物や豊富な水を活かして、漬物やおやきなどの食品のほか、ワイン、地ビールなどの飲料をつくる工場などがつくられました。

現在、スーパーマーケットなどでは、安曇野市内の工場でつくられた食品や飲料が売られているのを目にすることができます。

出典:『わたしたちの安曇野』
漬物製造工場
この工場は、地元産の野沢菜などの農産物を原材料とした漬物を生産販売しています。

ワイナリー
このワイナリーは、地元産のぶどうなどの果物でつくるワイン、ジュース、黒沢川の伏流水※でつくられた地ビールなどを生産販売しています。

※川の下の層を流れる地下水

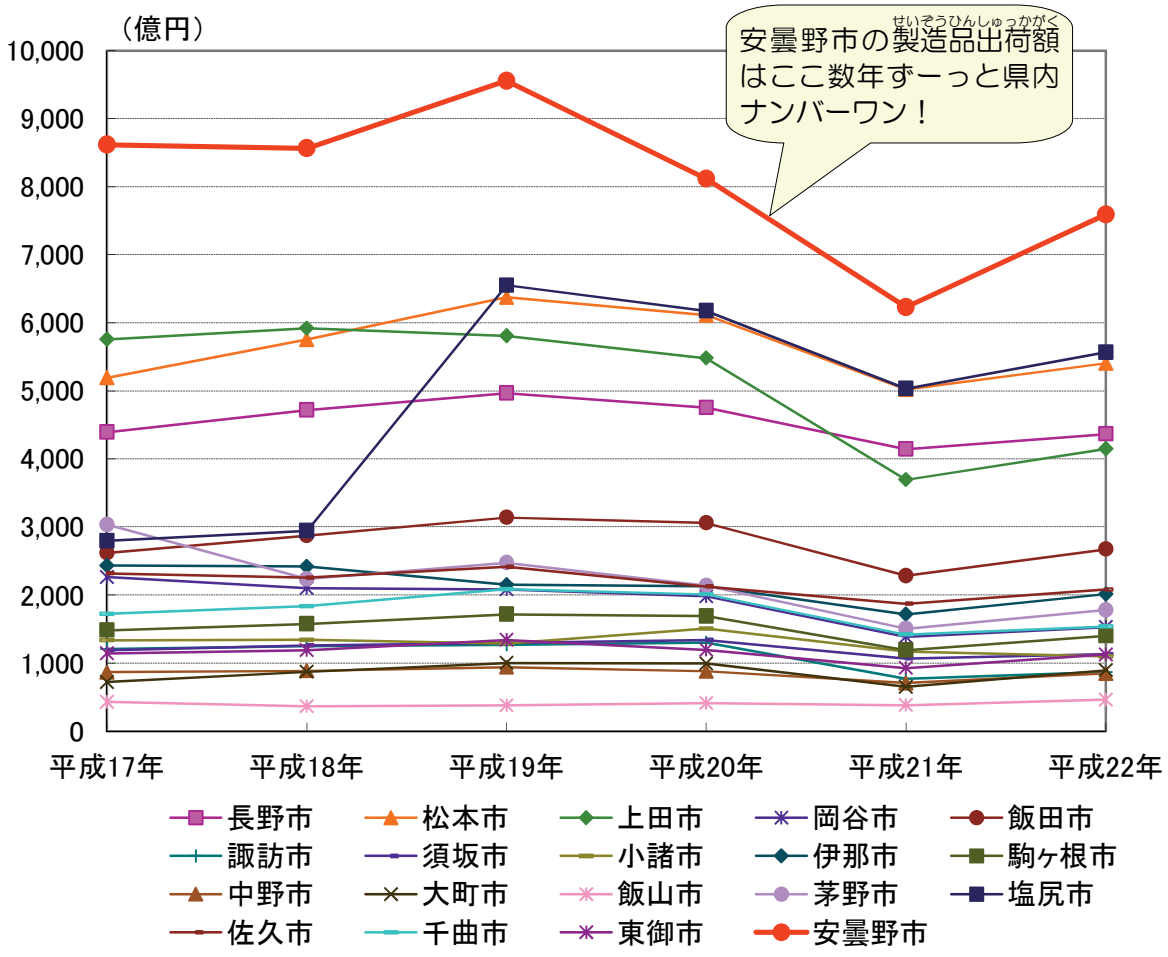
工場団地が増えた昭和 60 年代から平成の時代

昭和 53 年に、堀金村に「三田工業団地」がつくられましたが、それ以外の工場団地は、昭和 60 年代になってからつくられています。

出典:安曇野市商工会ホームページに加筆
あづみ野産業団地（豊科地域）

昭和 63 年の長野自動車道の開通で、工場に必要な材料を運んだり、工場でつくった製品を運んだりしやすくなったため、各地域の工場団地には、たくさんの工場が集まってきました。

また、豊科町に工場を建てられる土地が少なくなると、広い土地をより安い値段で手に入れられる穂高町や三郷村に移る工場も出てきました。しかし合併後は同じ市になったことで、現在の市の範囲では、工場の数は減らず、安曇野市は県内でも有数の工業都市となっています。



資料:平成 22 年(2010 年) 工業統計調査結果報告書

図 29　長野県内の市の製造品出荷額の変化

（6）商業

「商業」とは、お店などでわたしたちのくらしに必要なものを売る産業のことです。お店があることで、その場所にはにぎわいも生まれます。お店の立地を中心に、安曇野市の商業の歴史を振り返ってみましょう。

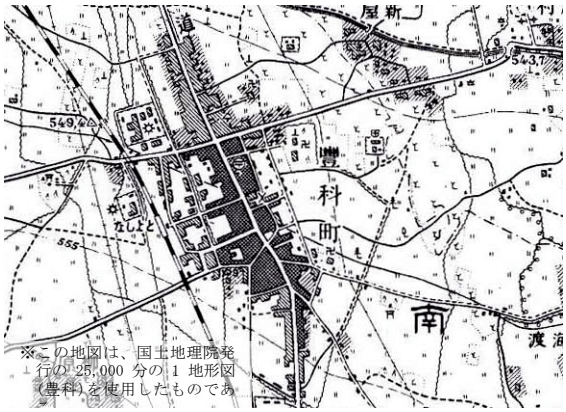
宿場のある街道沿いに栄えた戦前の商業

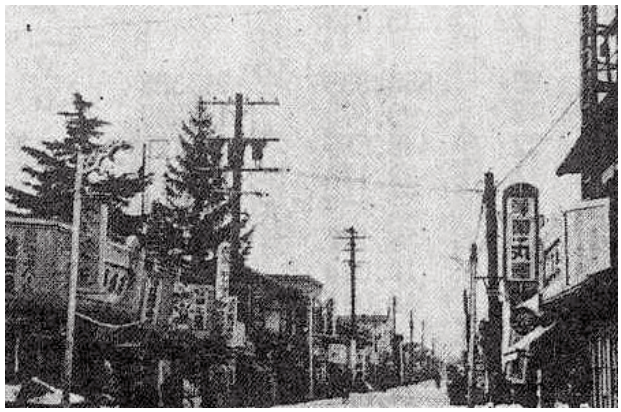
戦前に商業が栄えていたのは、江戸時代から多くの人々の行き交っていた街道沿いの宿場だったところでした。

安曇野市を通る街道といえば、「塩の道」とも呼ばれていたかつての千国街道※で、市内にはこの街道沿いに、成相新田宿（豊科地域）と保高宿（穂高地域）の２つの宿場がありました。現在の豊科地域と穂高地域の市街地は、この宿場から発展してきました。

それぞれの戦前のにぎわいを、下の図と写真で見てみましょう。

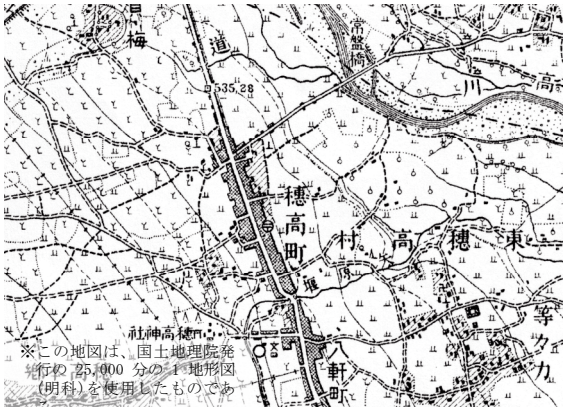
※「糸魚川街道」や「松本街道」とも呼ばれ、現在の国道 147 号･148 号とほぼ重なる道すじ





出典:『豊科町誌』

昭和 22 年の地図(左)と「豊科銀座」と呼ばれていた昭和 30 年の成相商店街(右)



出典:『穂高町誌』

大正２年の地図(左)と大正時代に安曇平一番の料理屋として栄えたといわれる穂高の北繁松前(右)

二大商業地にみる戦後の商業の移り変わり

古くから栄えていた豊科地域と穂高地域の二大市街地に注目して、戦後の商業の移り変わりを下の表にまとめました。

表４　二大市街地の商業の移り変わり

時代	特徴・出来事	飲食店を除くお店の数※1	
		豊科町	穂高町
昭和 30 年代	・お店の人と買い物客が言葉を交わして買い物をしていた時代（対面販売）。 ・「豊科銀座」といわれた成相の商店街が、南安曇郡の中で最も栄えていた。	昭和 37 年 307 店	337 店
昭和 40 年代	・スーパーマーケットが増加（買い物する人が、お店に並べられた商品を直接手にとって品定めできる:セルフサービス方式）していった時代。 ・団地の中にミニ商店街が多くできた。	昭和 47 年 341 店	327 店
昭和 50 年代	・車で動いて 1 か所で大量に買い物をするようになった時代。 ・昭和 54 年に、豊科町で初のコンビニエンスストアがつくられた。 ・昭和 56 年に、穂高町に初の第一種大規模小売店舗※2（穂高ファミリーデパート）が進出した。	昭和 57 年 375 店	355 店
平成元年 ～平成９年	・平成５年に、豊科町で初の第一種大規模小売店舗となる豊科サティ（現在はイオン豊科店）が進出した。	平成３年 368 店	374 店

※1　小売業（直接人々に商品を売る業種）と卸売業（小売業者にも商品を売る業種）のお店の数（飲食店を除く）

※2　お店の面積が 3,000 ㎡以上ある大きなお店

上の表に数字で表している「飲食店を除くお店の数」をグラフにしてみると、豊科町と穂高町の商業の発展の違いが少しわかるね。

昭和 30 年代は、穂高町の方が豊科町よりもお店の数が多いけれど、豊科町には、この数字に含まれていない飲食店がかなり多かったようだよ。

昭和 40～50 年代にかけてお店の数が増えた豊科町に対し、穂高町は平成の時代に入ってから、お店の数を大きく増やしているね。

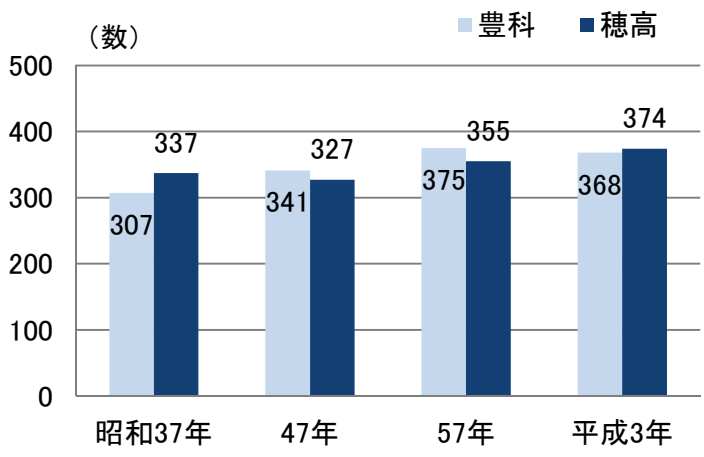


図 30　豊科町と穂高町のお店の数の比較

いまの商業地の広がり　～郊外の道沿いへの出店～

買い物に車を利用することが多くなった現在は、郊外に大きなお店やコンビニエンスストアなどができ、商業地は市全体に広がりを見せています。

【山麓線（通称）】

別荘地や観光施設のある山麓線沿いには、旅館などの宿泊施設の他、おそば屋さんやカフェなどの飲食店がいくつもできたよ。

【国道 147 号】

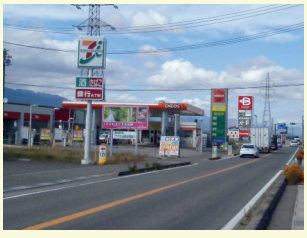
穂高地域では、昭和 37 年に、かつての千国街道の東側に新たな国道 147 号がつくられて、その沿道に色々なお店がたくさん集まってきたことで、現在のような姿になったんだね。

【国道 19 号】

鉄道駅のあった明科は、豊科、穂高に次ぐ市街地として古くから栄え、国道 19 号沿いには、昔ながらのお店が今もたくさん残っているよ。

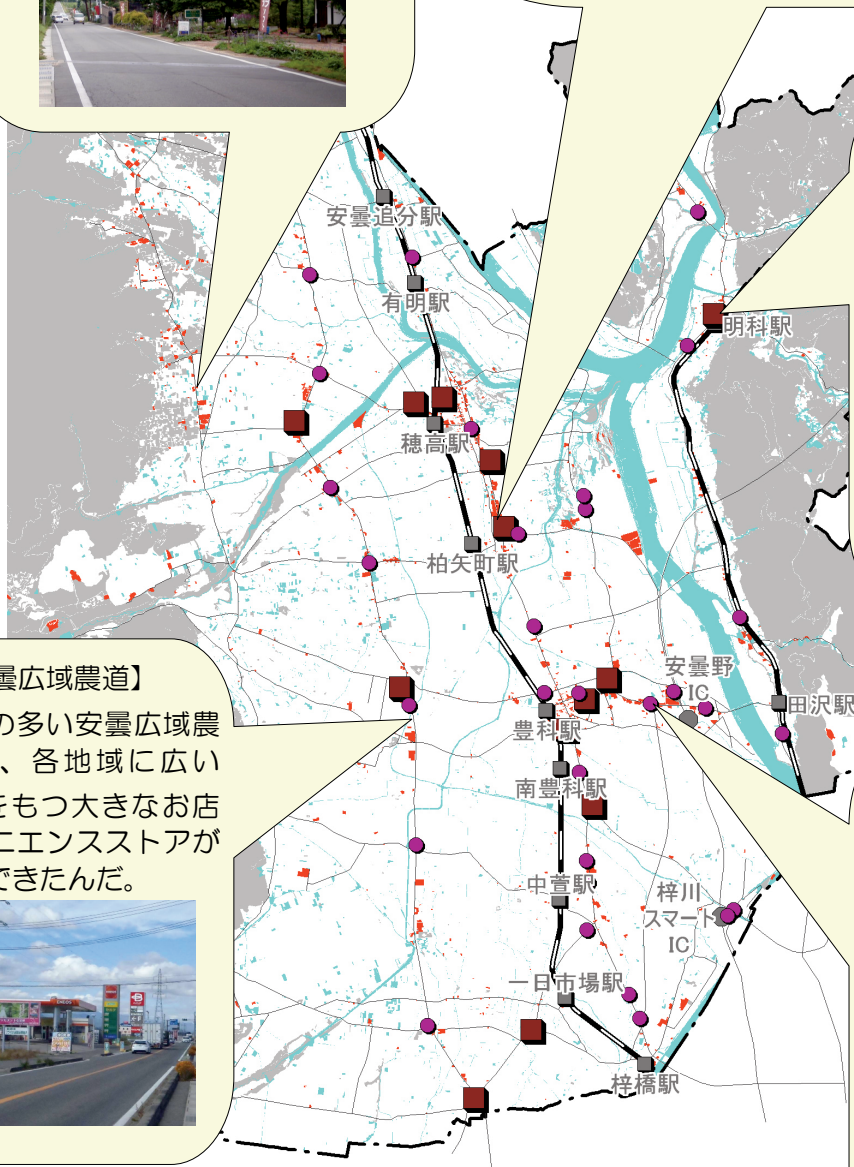
【安曇広域農道】

交通量の多い安曇広域農道沿いは、各地域に広い駐車場をもつ大きなお店やコンビニエンスストアがたくさんできたんだ。



【グルメ通り（通称）】

豊科 IC（現在の安曇野 IC）ができたことで、そこから豊科駅までの道路沿いは、「グルメ通り」と呼ばれるほどたくさんの飲食店が集まっているよ。



お店や宿泊施設など現在の商業用地
主なスーパーマーケット
コンビニエンスストア

※この図の商業用地の表示は、平成 20 年の都市計画基礎調査時点のものです。
またコンビニエンスストアは、平成 25 年 10 月 31 日時点で確認した位置を表示しています。

図 31　現在の商業地の広がり

5．観光と交流の進展

（１）観光

① 山岳・山地の観光

北アルプスなどの山々を目指して毎年多くの登山者が訪れるのは、安曇野市の観光の特徴の一つです。北アルプスの麓に湧く温泉も有名で、美しい自然と温泉を求めて、全国各地から観光客がやってきます。

明治期に始まった北アルプスの登山

〇北アルプスを有名にした明治時代の２人のイギリス人

・**ガウランド**：明治初期に、立山、槍ヶ岳などに登り、一帯の山々を「日本アルプス」と名付けました。

・**ウエストン**：明治 26 年に、ガイド上條嘉門次の案内で、前穂高岳に登り、「日本アルプス」の名前を世界に広めた宣教師。

出典：『堀金村誌』
ウエストン胸像

〇登山者の増加と山小屋などの整備

日本人では、明治 39 年に小島烏水が燕岳や槍ヶ岳に登っています。しかし、明治時代には、現在のような山小屋はなく、あったのは猟師や薬草取りが使った岩小屋や掘立小屋くらいでした。

現在のような山小屋の始まりは、大正３年に、長野県が遭難対策としてつくった石室※1で、その後、登山者が増え、昭和 30 年代にかけて、多くの山小屋や登山道が整備されました。

平成 24 年度は、「アルプス銀座」と呼ばれる人気のある登山コースに、約 10 万人※2が訪れています。

出典：北アルプス山小屋友交会パンフレットに加筆

図 32　主な山小屋の位置と整備された年

※１ 石でつくった部屋　　※２ 平成 24 年観光地利用者統計調査結果

昭和 40 年代に進んだ観光地開発

○中房渓谷と穂高温泉郷

高温の温泉の湧き出る中房渓谷は、江戸時代から地元の人々に温泉として利用されていました。

昭和 40 年代に中房渓谷から穂高地域の北アルプス山麓まで温泉を引くことができるようになると、その辺り一帯は温泉別荘地となりました。

ホテルや旅館、ペンションなどもたくさんでき、現在は、穂高温泉郷として年間 110 万人以上※の人々が訪れる場所になっています。

中房渓谷

穂高地域の山麓の別荘地

○烏川渓谷

烏川渓谷は、常念岳の登山道に通じる谷すじにあります。大正時代にはすでにその自然の美しさが紹介されており、県営公園や宿泊施設などが整備された現在では、年間約 17 万人※の人々が訪れています。

烏川渓谷

※平成 24 年観光地利用者統計調査結果

山林のゴルフ場開発

右の図の緑色が何を表しているのかすぐわかりましたか？

これらは山林につくられたゴルフ場です。現在市内には３つのゴルフ場があり、初めてつくられたのは昭和 47 年で、残りの２つは、昭和 61 年と平成元年に、それぞれつくられました。

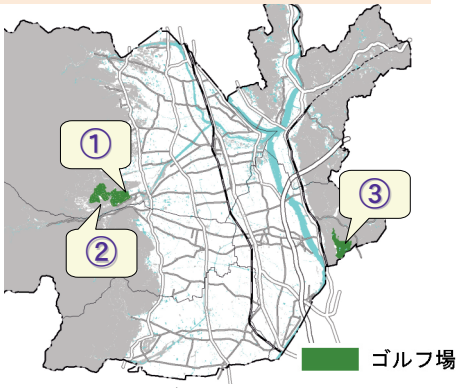


図 33　ゴルフ場の位置

① 穂高カントリークラブ
（昭和 47 年オープン）

② あづみ野カントリークラブ
（昭和 61 年オープン）

③ 豊科カントリー倶楽部※
（平成元年オープン）
※旧安曇野とよしなゴルフ倶楽部

② 平地の観光

安曇野は、昭和 50 年に NHK の連続テレビ小説「水色の時」の舞台となり、その後、若い女性向けのファッション雑誌などにも紹介され、多くの人々が訪れるようになりました。最近では、平成 23 年に再び、連続テレビ小説「おひさま」の舞台となり、注目を集めました。

わたしたちのくらしとともにある美しい田園風景をつくり出すもの

○きれいで、おいしい水

三川合流部には、長い時間をかけて地下に浸み込んだ北アルプスの雪解け水や雨水が湧き出る「安曇野わさび田湧水群」があります。

真夏でも水温 15℃以下のきれいな水が、1 日に 70 万ｔも湧き出し、昭和 60 年には環境省から「名水百選」に選定されました。

安曇野わさび田湧水群

○安曇野らしい田園風景をつくる屋敷林

市内の各地で見られる屋敷林は、かつては強い風や湿気を防ぐ役割をもち、燃料や肥料、建築物の材料としても利用されていました。

現在は、安曇野らしい田園風景の一つとして、屋敷林を守る取り組みが行われています。

屋敷林のある田園風景

○歴史ある神社やお寺、地域に伝わるお祭り

平安時代にはあったとされる穂高神社は、安曇野市の歴史ある神社の一つです。

毎年９月 26、27 日に行われる穂高神社の御船祭りは、高さ６ｍ、長さ 12ｍもある「大人船」と呼ばれる御船を、神社の境内でぶつけ合うという迫力のあるお祭りです。

穂高神社の御船祭り

○道祖神

安曇野市は道祖神の宝庫で、市内には 600 体以上の道祖神があるといわれています。

道祖神は古くから、豊作や健康などを祈願する身近な守り神として、あちこちにまつられ、現在は、観光で訪れる人々の心もなごませてくれます。

道祖神

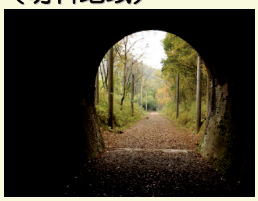
戦後から現在までに生まれた新たな観光スポット

碌山美術館（穂高地域）

彫刻家の荻原守衛（碌山）の作品などを展示している美術館。昭和 33 年に多くの人の協力でつくられたんだ。ツタのからまる赤レンガの建物は安曇野のシンボルにもなっているよ。

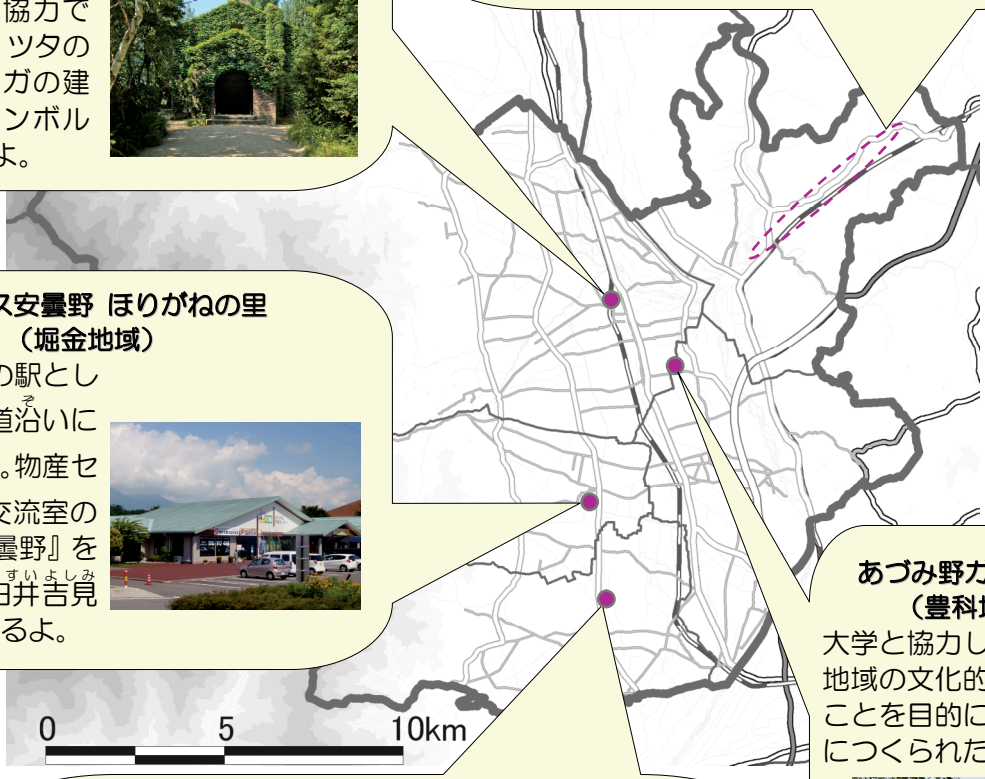
旧篠ノ井線廃線敷（明科地域）

昭和 63 年に廃線となった旧篠ノ井線の線路敷が、平成21年に、長さ約6kmのトレッキングコースに生まれ変わったんだよ。



アルプス安曇野 ほりがねの里（堀金地域）

平成 8 年に道の駅として、安曇広域農道沿いにつくられた施設。物産センターや情報交流室のほか、小説『安曇野』を書いた作家の臼井吉見文学館などもあるよ。



あづみ野ガラス工房（豊科地域）

大学と協力し、ガラスを地域の文化的産業とすることを目的に昭和 60 年につくられた施設だよ。

楡の里 三郷サラダ市（三郷地域）

安曇広域農道沿いに平成 11 年につくられた施設。地元の農産物や手打ちそば、みそなどの特産物を販売しているよ。北アルプスの麓を走る 31.5km の「日本アルプスサラダ街道」の起終点にもなっているんだ。

図 34　多くの人々が集まる各地域の観光施設

旧町村ごとにある公共の宿

旧５町村の時代には、町村ごとに宿泊施設が建設されました。つくられた年代は違いますが、公共の宿として観光客はもちろん、様々な目的で多くの住民に利用されています。

表５　公共の宿の建設の歴史

開館した年	施設の名前	建設した当時の町村	施設の概要
昭和 46 年	長峰荘	明科町	長峰山の麓に建てられた施設で、北アルプスと安曇平を一望できる眺めの良い場所にある。
昭和 48 年	しゃくなげ荘	穂高町	穂高温泉郷に建てられた施設で、この施設の温泉は、中房渓谷から引湯している。
昭和 61 年	ビレッジ安曇野	豊科町	わさび田湧水群のある「安曇野の里」に建てられた施設。研修や会議などもできる多目的施設で、近くには、あづみ野ガラス工房や田淵行男記念館がある。
平成８年	ほりでーゆ～四季の郷	堀金村	烏川渓谷沿いに建てられた施設。天然温泉を利用した温泉宿泊施設で、近くにはキャンプ場やコテージ、マレットゴルフ場などもある。
平成 10 年	ファインビュー室山	三郷村	地下深くから室山の頂上まで温泉を引湯してつくられた施設で、素晴らしい眺めにちなんで、この名前が付けられた。室山アグリパークと一体的な施設となっている。

図 35　公共の宿の位置

（2）交流

８つの自治体との友好関係

昭和 40 年代の終わり頃から、旧５町村では様々なことをきっかけに、他の自治体と交流するようになり、お互いの交流をより深めるために、自治体同士が友好関係を結ぶようになりました。

昭和 49 年の穂高町と東京都江戸川区との「友好都市盟約」に始まり、旧５町村の時代に友好関係が結ばれた自治体の数は、国内外合わせて８つで、それらの関係は安曇野市になっても引き継がれ、現在も交流が続けられています。

表６−①　他の自治体との交流の歴史（次のページに続く）

友好関係の内容	交流が始まったきっかけ
昭和 49 年２月 15 日 友好都市盟約 穂高町 東京都 江戸川区	穂高町が有明小学校跡地を江戸川区に譲渡したことが縁で始まる。 昭和 51 年６月に、穂高町の有明地区に江戸川区民の健康施設として「穂高荘」がつくられた。 平成 19 年８月４日には、安曇野市として友好都市提携を結び直した。
昭和 59 年９月 22 日 友好都市提携 三郷村 埼玉県 三郷市	「三郷」という同じ自治体名であったことから始まる。後に友好都市提携する奈良県三郷町とともに、３市町村による「三郷友好都市交流推進協議会」をつくった。 平成 18 年７月１日には、安曇野市として友好都市提携を結び直した。
昭和 61 年 10 月 18 日 友好都市提携 三郷村 奈良県 三郷町	「三郷」という同じ自治体名であったことから始まる。先に友好都市提携していた埼玉県三郷市とともに、３市町村による「三郷友好都市交流推進協議会」をつくった。 平成 18 年７月１日には、安曇野市として友好都市提携を結び直した。
昭和 62 年 11 月３日 姉妹都市盟約 豊科町 東京都 武蔵野市	昭和 58 年、当時の武蔵野市関係者が豊科町出身だったことが縁で始まる。 平成 19 年２月５日には、安曇野市として友好都市提携を結び直した。
平成５年 11 月 25 日 姉妹都市提携 豊科町 オーストリア共和国 チロル州 クラムザッハ	昭和 61 年、豊科町があづみ野ガラス工房をつくった頃、ヨーロッパで唯一、国立のガラス専門学校があるクラムザッハを視察したことが縁で始まる。 平成 19 年 11 月４日には、安曇野市として姉妹都市提携を結び直した。

表６−②　他の自治体との交流の歴史（前のページの続き）

友好関係の内容	交流が始まったきっかけ
平成６年11月３日 友好交流推進協定 穂高町 福岡県　福岡市　東区	古代に、「阿曇族※」が、現在の福岡市から現在の安曇野市の辺りに移り住んできたとされていることが縁で始まる。 安曇野市となってからも交流を続けている。
平成10年１月28日 友好親善提携 堀金村 神奈川県　真鶴町	堀金村で、住民同士の交流が縁で始まる。 平成18年９月30日には、安曇野市として友好都市提携を結び直した。
平成10年５月28日 友好村郷提携 三郷村 中華人民共和国 遼寧省　五三街道	平成９年、三郷村が海外の自治体との交流を進めようと調査したとき、三郷中学校とすでに友好姉妹校の関係にあった中華人民共和国の中学校がある地域（遼寧省）に、「三郷」と名前のつく場所（「五三郷（当時）」）があったことが縁で始まる。

※「阿曇（安曇）」を氏とする意識で連帯している人々の集まり

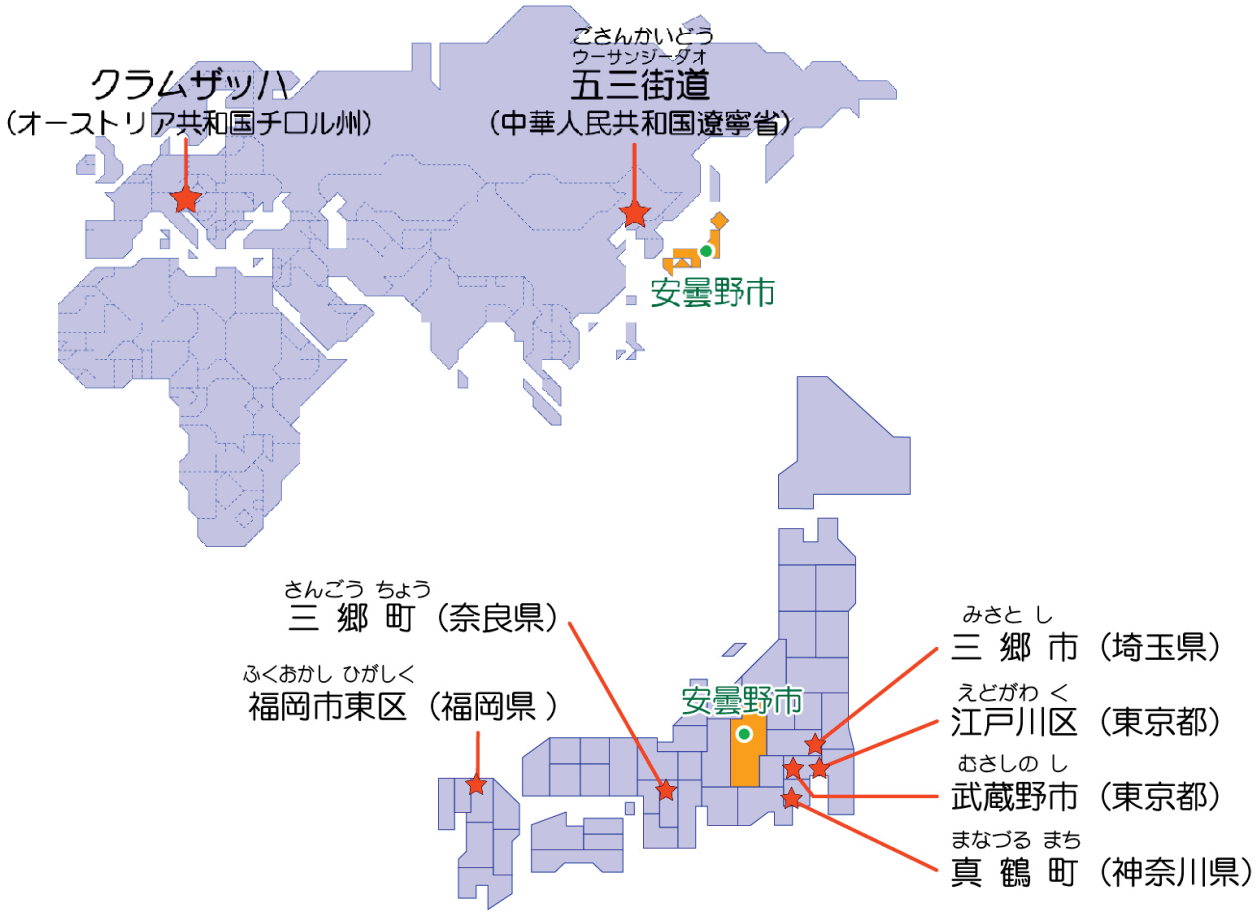


図 36　安曇野市と友好関係にある自治体の位置

安曇野検定【総合編】ジュニアの部　学習資料
未来につなぐふるさと安曇野

発行年月　平成 25 年 11 月

発　　行　安曇野市

編　　集　安曇野市教育委員会社会教育課

〒399-7102

長野県安曇野市明科中川手 2914 番地 1（旧明科公民館）

電話：0263-62-4565　FAX：0263-62-3525

Eメール：shakaikyouiku@city.azumino.nagano.jp

長野県　地域発　元気づくり支援金活用事業